

松本市文化財調査報告 No.84

SANNOMIYA

松本市三の宮遺跡IV

—— 緊急発掘調査報告書 ——

1990・3

松本市教育委員会



松本市文化財調査報告 No.84

SANNOMIYA

松本市三の宮遺跡IV

—— 緊急発掘調査報告書 ——

1990・3

松本市教育委員会



第1号礎石(北から)



第4号礎石(東から)



7. 11. 6

12, 13, 14



65, 61, 63

67, 38, 39, 37

出土陶磁器

序

過去において幾多の注目すべき成果を取めている島立三の宮遺跡の発掘調査も今年で4回目となりました。今回の調査は昭和58年以降行われてきたほ場整備事業にあたっての緊急発掘調査で、埋蔵文化財保護の立場から記録保存をすることがその目的であります。

調査は松本地方事務所から松本市に委託され、市教育委員会職員を中心に地元考古学者・地区の皆様の御協力を得て、平成元年11月17日から翌年の1月26日にかけて行われました。厳寒のなかで調査作業に携わった調査員・作業員の皆様の御苦労に心から感謝いたします。

松本平では近年大型開発が進み、多くの遺跡が次々と失われていきます。そこでこれらの歴史的財産を記録に留めておくことは私達に課せられた責務であると考えております。本書が埋蔵文化財保護の機運を一層高める一つの契機となれば幸いです。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、地元の皆様に厚く御礼申し上げ序といたします。

平成2年3月

松本市教育委員会教育長 松村好雄

例 言

- 1、本書は、昭和63年11月14日から平成元年1月26日にわたり実施された、松本市島立三の宮に所在する、三の宮遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、本調査は、松本市が長野県松本地方事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
- 3、現場作業は、高桑俊雄と松沢利幸が担当した。
- 4、本書の執筆は下記の通りであり、下記以外のものについては高桑が行なった。

第1章 事務局

第2章 第1節 太田守夫

第3章 第3節 1、神沢昌二郎

第4章 1、倉科明正

- 5、本書作成に関する作業分担は次の通りである。

編集作業：滝沢智恵子

遺構図作成：今村嘉子、丸山恵子、百瀬二三子、米山明子

遺構図整理、トレース：神沢ひとみ、上條尚美

遺物復元、実測、トレース：神沢昌二郎、金井ひろみ

一覧表作成：川窪命子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、高桑（遺構）

- 6、本書作成に当たり、次の方々より御協力頂いた。

普明勇次、浅野成美、島立土地改良区

鉄器に関しては、長野県埋蔵文化財センター調査研究員、宇賀神誠司氏の手を煩わせた。又、第4章、2に関わる伝承等に関しては、地元、島立公民館長、丸山光清氏より御教示頂いた。記して感謝申し上げる。

- 7、本調査に関する出土遺物及び図類等は、松本市教育委員会が保管している。

目 次

巻頭カラー

序

例 言

目 次

第1章 調査経過

第1節 文書記録……………3

第2節 調査体制……………3

第3節 調査日誌……………6

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質……………9

第2節 周辺遺跡……………11

第3章 調査結果

第1節 調査の概要……………13

第2節 遺構

1 礎石……………18

2 掘立・欄列・ピット……………22

3 竪穴状遺構……………28

4 土坑……………28

5 井戸……………35

6 集石……………35

7 溝……………38

第3節 遺物

1 土器・陶磁器……………39

2 鉄器・銅製品……………53

3 石器・木器……………56

第4章 神宮寺について

1 古文書資料……………59

2 神宮寺周辺……………61

第5章 調査のまとめ……………64

挿図目次

第1図	調査地の位置	4	第18図	土坑(4)	34
第2図	調査地の範囲	5	第19図	井戸	36
第3図	周辺遺跡	12	第20図	集石・溝	37
第4図	遺構配置図(1検)	14	第21図	出土陶磁器(1)	46
第5図	遺構配置図(2検)	15	第22図	出土陶磁器(2)	47
第6図	遺構配置図(3検)	16	第23図	出土陶磁器(3)	48
第7図	遺構配置図(4検)	17	第24図	出土陶磁器(4)	49
第8図	礎石(1)	19	第25図	出土陶磁器(5)	50
第9図	礎石(2)	20	第26図	出土陶磁器(6)	51
第10図	礎石(3)	21	第27図	出土陶磁器(7)	52
第11図	掘立(1)	25	第28図	鉄器	54
第12図	掘立(2)・柵列(1)	26	第29図	銭拓影	55
第13図	柵列(2)・ビット	27	第30図	石器	57
第14図	竪穴状遺構	29	第31図	石器・木器	58
第15図	土坑(1)	31	第32図	昭和59年島立(史跡等)略図	62
第16図	土坑(2)	32	第33図	周辺小字名	63
第17図	土坑(3)	33			

表目次

第1表	掘立一覧表	23
第2表	柵列一覧表	24
第3表	土坑一覧表	30
第4表	溝一覧表	38
第5表	出土陶磁器一覧表	44
第6表	鉄器一覧表	55
第7表	石器・木器一覧表	56

第1章 調査経過

第1節 文書記録

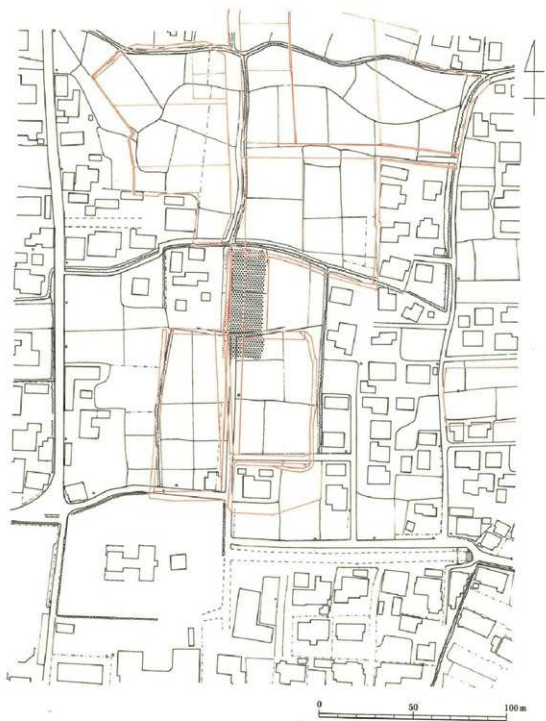
- 昭和62年9月7日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年4月7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月1日 昭和63年度県営はつぎ整備事業島立地区三の宮遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月31日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月12日 昭和64年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 11月17日 三の宮遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 12月22日 昭和64年度補助事業計画書提出。
- 平成元年2月22日 三の宮遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 3月20日 三の宮遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月3日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月3日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月24日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月15日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月18日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 9月11日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

- 調査団長** 中島俊彦（教育長）
- 調査担当者** 神沢昌二郎（市立考古博物館長）
- 現場担当者** 松沢利幸、高桑俊雄（社会教育課）
- 調査員** 太田守夫（地質）、西沢寿晃（骨類）、森 義直（自然遺物）
- 協力者** 浅野房子、浅野八重子、五十嵐潤子、石合佐千子、今村嘉子、海野澄子、大久保楳子、小沢 泉、小沢 勝子、金井ひろみ、上条尚美、神沢ひとみ、北野よ志子、桑井まさ、小林清志、小松正子、高瀬小起子、田口吉康、田多井うめ子、田多井 亘、武井 縁、塚田つた江、塚田文子、綱島正道、遠山明、直井由加理、永沢関子、中島三寿子、萩野幸枝、波多野 天、原沢一二三、松尾明忠、松本かつ代、松森幸子、丸山恵子、南山久子、望月依代子、百瀬一子、百瀬まよ、百瀬千恵子、百瀬峰代、百瀬二三子、百瀬良子、百瀬康子、山口順子、山田博子、山本みね、六川由美子、横林晋代子、米山明子、五十嵐千恵



第1図 調査地の位置



第2図 調査地の範囲

第3節 調査日誌

- 昭和63年11月14日 (月) 曇 午後より重機による表土剥ぎ開始。市教育委員会：高桑、松沢（以下市教委は同様。松沢は11月25日迄）
- 11月15日 (火) 晴 重機による作業継続。作業員：田多井亘（以下頁数のみ記載）
- 11月16日 (水) 曇後雨 重機による作業継続。ブルドーザー投入。テント、発掘用資材搬入。普明氏宅への進入路を除去する。作業員：1名
- 11月17日 (木) 曇 重機による表土剥ぎ午前中で終了。テント設営。発掘用機材搬入。第1検出面検出作業開始。作業員：17名
- 11月18日 (金) 曇 昨夜の雪のため作業中止。
- 11月21日 (月) 晴 礎石検出作業。第1、2号礎石（以下○礎石と記載）を写真撮影。第1号土坑（以下○土坑と記載）を半分削作業。作業員：15名
- 11月22日 (火) 晴 検出作業継続 トランシット測量。平面測量開始する。第1、2号建物址（以下○礎と記載）を半分削作業。第1号竪穴状遺構（以下○竪と記載）にトレンチを入れる。作業員：20名
- 11月24日 (水) 曇 昨夜の雨のため作業中止
- 11月25日 (木) 雪 1建、1竪土層図作成。遺構分布図を作成。作業員：6名
- 11月28日 (日) 晴後曇 1、2建完掘、1礎石も含め写真撮影。重機にて盛土を用地北側へ押し出す。作業員：18名
- 11月29日 (火) 晴 重機により用地南半部より第2検出面まで削平開始。2礎石土層図作成。作業員：19名
- 11月30日 (水) 晴 1礎石の中央部5cm程下げる。2礎石土層図作成完了。1集石は石を取り上げて終了。1竪は掘り下げ継続。重機による削平継続。作業員：21名 見学者：高立公民館長丸山光輝氏
- 12月1日 (木) 晴 重機で削平継続。1礎石の周囲及び中央部を更に3～5cm下げる。第1号櫓列址（以下○櫓列と記載）を半削。1礎石写真撮影。1竪掘り下げ継続。2土坑土層図作成。東南部より検出作業。作業員：15名
- 12月2日 (金) 晴 1礎石の周囲削平継続。2櫓列検出。1竪の石流入状況の図作成。作業員：16名
- 12月6日 (火) 晴 1竪平面測量開始。1礎石の中央断面観察、図面作成。北部の検出作業。作業員：17名
- 12月7日 (水) 晴 3土坑、第1～3号溝址（以下○溝と記載）の土層図作成。2櫓列の半削。1

写真撮影。作業員：17名

- 12月8日 (休) 晴 重機で第2検出面まで削平終了。4礎石を検出、写真撮影。4、5、8溝土層図作成。作業員：16名
- 12月9日 (休) 曇 トランシットによる測量。作業員：2名
- 12月12日 (休) 晴 4礎石測量。2楯列土層図作成。作業員：3名
- 12月13日 (休) 晴後曇 4礎石、2楯列平面図作成。重機により南部から第3検出面まで削平開始。作業員：3名
- 12月14日 (休) 曇 4礎石測量。1壁が西に広がり、石が多い。検出作業開始。作業員：8名
- 12月15日 (休) 曇 重機による削平継続。検出作業続行。4礎石、2楯列写真撮影。作業員：8名
- 12月16日 (休) 曇 重機による作業継続。検出作業継続。ビット半割作業。作業員：14名
- 12月19日 (休) 曇 4～14土坑半割作業。7溝土層図作成。作業員：14名。見学者：丸山光輝氏
- 12月20日 (休) 晴 平面測量。4～14土坑土層図作成。土坑、ビット完掘。作業員：15名
- 12月21日 (休) 晴 土坑写真撮影、平面図作成。第4検出面まで重機による削平を開始する。作業員：14名
- 12月22日 (休) 晴 重機による削平継続。検出作業開始。井戸掘り下げ開始。作業員：15名
- 12月23日 (休) 晴 重機による削平終了。検出作業終了。井戸掘り下げ継続。作業員：16名
- 12月26日 (休) 晴 大変な寒さ。トランシットによる測量。15～31土坑半割作業、土層図作成。作業員：11名
- 12月27日 (休) 晴 トランシットによる測量継続。土坑半割作業、土層図作成。作業員：11名
- 12月28日 (休) 雪 朝雪かき作業。土坑を全掘、写真撮影。平面測量作業を開始。作業員：11名
- 1月6日 (休) 曇 写真撮影。作業員：3名
- 1月7日 (休) 曇 早朝天皇御崩御、午後2時元号「平成」と決定。
- 1月9日 (休) 小雨 土坑、ビット掘り下げ作業。作業員：10名
- 1月10日 (休) 晴 暖かい一日 年末にプレハブ撤去、今日再びプレハブ設営。9、10、11溝土層図作成。井戸掘り下げ再開。土坑掘り下げ。作業員：11名
- 1月11日 (休) 曇 ビット残部掘り下げ。井戸掘り下げ継続。平面測量。作業員：12名 見学者：長野県埋蔵文化財センター調査研究員百瀬新治氏、他3名。北栗中島要氏
- 1月12日 (休) 曇 井戸、溝、土坑掘り下げ継続。土坑写真撮影。作業員：12名
- 1月13日 (休) 曇 測量は終日。井戸掘り下げ継続。数ヶ所を試掘する。作業員：11名
- 1月14日 (休) 曇 井戸深い為重機にて北半分を大きく切り取る。一部発掘用資材の搬出。作業員：12名
- 1月17日 (休) 晴 井戸更に掘り進める。今日より遺物整理作業を開始する。現場終了後も継続する。作業員：7名 見学者：島立出張所長、他2名

- 1月18日 (休) 曇 2 集石、3 欄列平面図作成、写真撮影。作業員：7名
- 1月19日 (休) 小雨 井戸掘り下げ継続。作業員：6名
- 1月20日 (陰) 雨 遺物整理作業。作業員：4名
- 1月21日 (出) 曇 井戸土層図、平面図作成。これで測量を終了する。写真撮影。作業員：7名
- 1月23日 (卯) 雪 遺物整理作業。作業員：3名
- 1月24日 (火) 曇 遺物整理作業。作業員：3名
- 1月25日 (休) 晴 遺物整理作業。作業員：4名
- 1月26日 (休) 晴 標高測定。測量用具と遺物の搬送をもって全てを終了する。作業員：4名
現場終了後も遺物整理継続。報告書に向けて室内作業本格化する。



調査開始



第2検出面



第3検出面



調査終了 翌日の大雪

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1 位置と地形

本調査地は松本市島立沙田神社の社域の北に隣接した地籍(標高590m)で、明治4年廃仏棄釈により廃寺となった神宮寺跡に当たっている。一昨年、昨年度に報告された島立小学校・沙田神社周辺の調査と同じ、梓川扇状地の沖積扇状地性堆積の最末端に当たり、堆積層も類似する。旧河床は北栗集落からの方向(N60~70°E)と考えられ、2~3層の礫層(特に最下部砂礫層は厚い)の堆積に共通点が多い。しかし礫の堆積は扇状地性の乱流路や蛇行路であるうえ、地下50cmまでは後の用水路が加わり複雑となる。

調査地は廃寺となる明治4年まで寺域であり、その後水田として利用されてきたところである。このため地表から深さ50cmまでは、新たに水田として後の造成である。東方の奈良井川によって切られた段丘崖までの距離は250mほどである。

2 堆積層と礫

挿図1は調査地の堆積層の地層断面である。前述のとおり地表から深さ50cmまでは、後の水田造成にかかわるもので上部は耕土、下部は鉄分の沈着土で一様である。60cm以深は一応自然堆積とみるが、寺跡による堆積の変化も加わっている。乱流による堆積は数mの近くでも堆積層が違い、同時異相が見られる。

地層断面を旧河流の方向で見ると、挿図1の(1)と(2)、(3)と(4)、(5)と(6)・(7)が同層、またはそれに近い堆積と考えられる。

(1)と(2)は発掘地の南部で、(1)は西側、(2)が中央で、東側は(1)と同じである。東西はいずれも深さ40cmの表面に礫層が広がっている。(2)と同時異相か、別の最上層の礫層か判断が難しい。

(3)と(4)は3mほどの距離に東西に並んだ断面で、同じ堆積層であるが、(4)は土層がやわらかいうえ、下部の黒色土が破壊されており、自然堆積と認められない礫が混じった土層であることから、人為の加わった堆積層と見られる。

(5)(6)(7)は中央部の西・中・東(井戸)と並んだ堆積層で、(5)の付近では寺の建物の跡や径40cmぐらゐの礎石がみられ、(7)は深井戸である。

深さ90cmを越えると(2)(3)と(7)は同時異相と考えられ、(2)(3)は土層、(7)は河床を表わした砂礫層である。特に(2)と(3)は距離が離れているが、この堆積層は沙田神社周辺の発掘地と共通するもので、

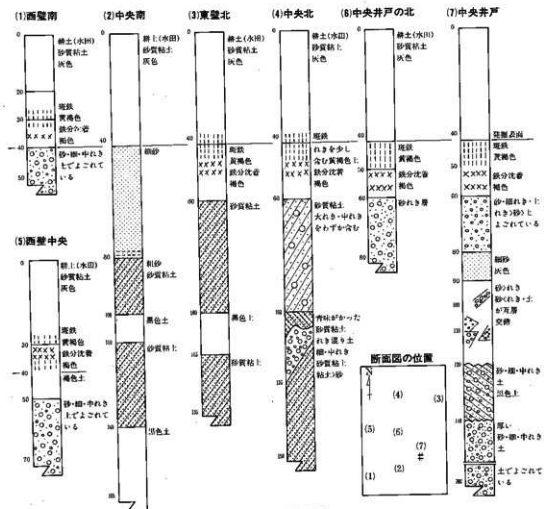


插图1 地層断面図

黒色土は下部層の二層に相当する。(7)の礫混じり黒色土は(2)(3)の上の黒色土に当たり、地表面だった時にも河流の性格をもっていたものと考えられ、三回の堆積の更新が読める。

以上の堆積状況を見て、最も自然堆積と思われるものは(2)(3)で、(7)は同時異相の礫堆積を続けていたものであろう。また(5)(6)の下部層が見られないため断層はできないが、(7)と同様と考えれば二層の砂礫層(2m以下は別の層かもしれない——とすれば三層)から、附近の調査地と同様に三回の堆積の更新が読める。さらに堆積状況が、砂礫の連続であることからみて旧河床と思われる。

砂礫層の礫の形・大きさは $4 \times 6 \cdot 5 \times 3 \text{ cm}$ を最大とする細中礫に属する円礫である。礫種は梓川系統の砂岩・硬砂岩と砂岩・頁岩のホルンフェルスが多く、花こう岩・チャート・珪岩等が混じる。

3 地形の形成と遺跡

三層の砂礫層、二層の黒土層からは三回ほどの堆積の更新が分かり、複雑な堆積も見られたが、この堆積環境は周辺遺跡と同じである。遺跡層は寺跡や井戸を除くと地表から50~60cmのところと考えられる。

第2節 周辺遺跡

島立地区及び近隣の新村、和田、そして奈良井川、銀川の河岸段丘上と周辺の遺跡、さらに近年の発掘例を取り上げながら時期的に概観してみたい。

縄文時代は中期の遺構が奈良井川の段丘上、牛の川、神戸、くまのかわ遺跡にみられ、島立地区でも南栗、北栗遺跡発掘調査（松本市文化財報告 No.35）の際に遺物を得ている。ただし現地地表下1.5～3.5mと驚くほど深く通常はほとんど縄文時代の遺物は目に触れない。

弥生時代になると山形村境に境塚遺跡、奈良井川左岸宮瀬本村遺跡などが知られているが、いずれもここからはかなり遠い。島立地区では堀川添いに中期の住居址の存在が明らかになった。

古墳時代では、新村に安塚古墳群、秋葉原古墳群の終末期の古墳群がある。三の宮遺跡の調査でも弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址を調査、又、昨年小学校旧グラウンド内に古墳時代前期の遺物も得ている。又、未報告であるが、島立小学校南東部に古墳時代中期からの住居址を検出しており、今まで空白だった時期を埋める新たな資料として注目に値する。

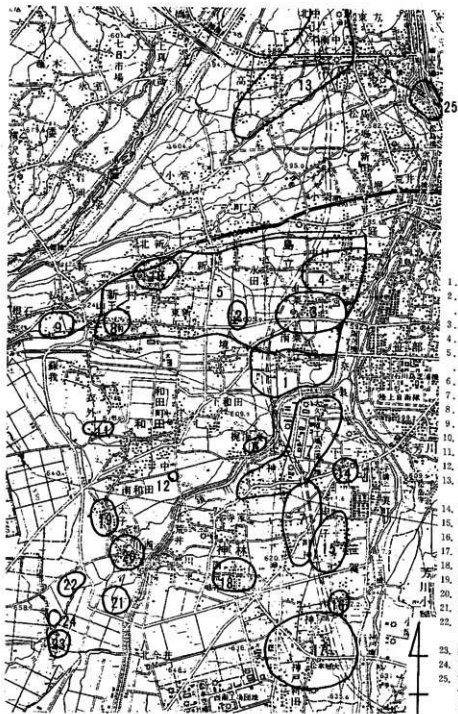
奈良時代から平安時代にかけては奈良井川添いで下神、町神、下二子、中二子、くまのかわ、神戸や島内遺跡群などを上げることができる。

中二子遺跡は昭和60年に榎長野県埋蔵文化財センターが調査、奈良時代を中心とする28軒の竪穴住居址、21棟の掘立柱建物址が発見されている。くまのかわ遺跡（上二子遺跡）は昭和56年に松本市教委、昭和60年に榎長野県埋蔵文化財センターの調査で、計9軒の竪穴住居址が発見された。神戸遺跡は、昭和55年に松本市教委、昭和60年に榎長野県埋蔵文化財センターが調査、平安時代の竪穴住居址27軒、掘立柱建物址、中世の水田址などが発見された。

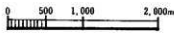
昭和62～63年に調査された三間沢川左岸遺跡では、平安時代前期末頃を中心とした270基の住居址と溝等を調査し、出土遺物は銅印、銅鏡、八棱鏡、帯金具と、多量の緑釉陶器などを得ており、地方荘園の様相を見せ今後予定される調査を興味あるものとした。

島立地区では三の宮遺跡、北栗遺跡、南栗遺跡がそれぞれ西方に1km以上の奥行きをもって絶え間なく広がりが巨大な遺跡群を形成している。松本市教育委員会による過去5年間の調査で、この範囲内から250棟に及ぶ竪穴住居址が発見され、昭和60・61年度に榎長野県埋蔵文化財センターが行った長野自動車道敷地内の調査では、実に1,000棟という驚くべき数の竪穴住居址が現れた。この3遺跡の西奥の一帯は、かつて古代に遡る条里跡の可能性があると強く指摘されていたところ（島立条里の遺構）であるが、それについて積極的に肯定できる材料は宋だに得られず、むしろその範囲内から断続的に古代以降の集落址が見出されている。

箕賀地区～島立地区にかけての奈良井川の段丘上にある遺跡は古代面の下に縄文時代の層がある。このことは、銀川や梓川と異なり奈良井川の流路が原始から安定していたことを物語ろう。



1. 南栗道跡 (1983, 84)
 2. 高岡中学校道跡
(1984, 85, 88)
 3. 北栗道跡 (1985-87, 88)
 4. 一の宮道跡 (1988)
 5. 新村島立米車道の遺構
(1984-87, 88)
 6. 推海道道跡 (1985)
 7. 下神・町神道跡 (1983)
 8. 秋葉原道跡 (1982)
 9. 安塚内墳群 (1978)
 10. 新村道跡
 11. 西和田道跡
 12. 和田町道跡
 13. 島内道跡群
(1984-87)
 14. 下二子道跡
 15. 中二子道跡
 16. くまのかみ道跡 (1981)
 17. 神戸道跡群 (1979)
 18. 南荒井道跡
 19. 太子堂道跡
 20. 川西道跡
 21. 川西開田道跡
 22. 三間沢川左岸道跡
(1987, 88)
 23. 境原道跡
 24. 西原南道跡
 25. 宮瀬二ツ塚道跡 (1964)
 - 宮瀬本村道跡 (1985, 86, 88)
- () 内は調査年度



第3図 周辺道跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

調査地の大半は水田となっており、作土(青灰色土)が約20cmある。これを除去すると、拳大の礫を広く敷いた所が現われ(1号礫石)これをまず第1検出面とした。ここでは礫石、土坑が各2、掘立、欄列、竪穴状遺構、集石が各1、溝3本などを検出した。

第2検出面は、1号礫石の下部を10~15cm下げたところ4号礫石が出現した為、このレベルで大きく広げている。土色はマンガン分が沈澱を始めるが、灰色も部分的に残り、マグラ状にも見えている。ここでは礫石、欄列が各2、土坑1、溝3本を検出した。又、南東にビット群が見えつつあったが、明瞭に分からず、下部検出面に残した。なお北部は黄色土塊を移入しているところ(埋立部)があるが、その範囲も明瞭には分らない。

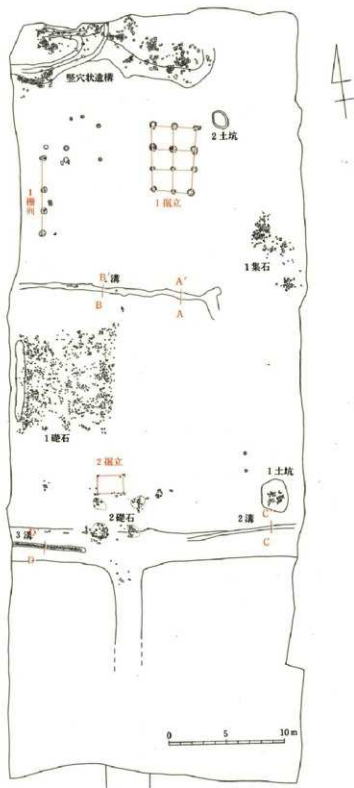
第3検出面は、第2検出面より更に15cm程下げたレベルである。土色はマンガン分沈澱により茶褐色を呈している。ここでは礫石1、欄列2、土坑10を数え、溝6本、遺物を含むビット等を検出している。又、第2検出面同様、不明確な埋立部と更に土及び砂を埋めた北埋立部が見えている。

第4検出面は、第3検出面より更に15~20cm下げたところである。土色は、第3検出面と同様である。欄列3、井戸1、土坑20、集石1、溝3本、他に北部に多い小ビット等を新たに検出している。

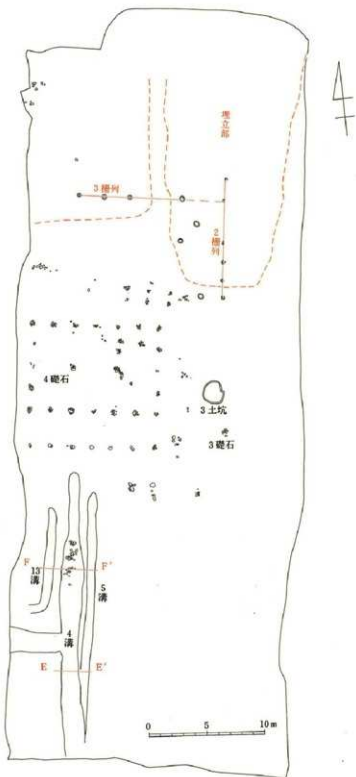
以上のように検出面を徐々に下げ調査を行なっているが、当地には沙田神社の別当寺としての「神宮寺」があったとされるが、その創建も廃絶も詳細には分っていない。調査地は、「寺跡」を中心に「宮ノ下」という小字名が見える地籍を選んでいる。前述の礫石などはこの寺の礫石である。寺はその後明治時代に入り廃仏毀釈に遭い、明治6年頃にはすでに博明学校という施設がここに建てられたようである(註1)。また調査地西際には、住職が還俗して寺の院号を姓に変えた普明氏宅がある。

遺物は第1検出面から第4検出面まで一様に見られるが、竪穴状遺構から特に多く、土坑にも多くなるものがある。これらは廃棄用の場所と考えられる。遺物の種類は多く、陶器、磁器などの焼き物に、灯明皿、皿、香炉、碗、花瓶などが多い。他には内耳鍋、土師質土器、そして須恵器も見られる。また、角釘などの鉄器、寛永通宝などの銭、石臼などもあった。これらの遺物は、ごく一部の古代のものを除くと、16~19世紀のものであり、この地点の開発は島立でも特に新しいものであることを示している。

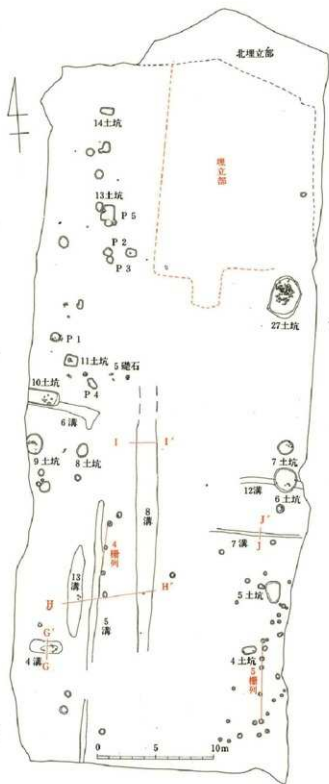
註1 浅野成美氏所蔵「島立村三ノ宮絵図」による。



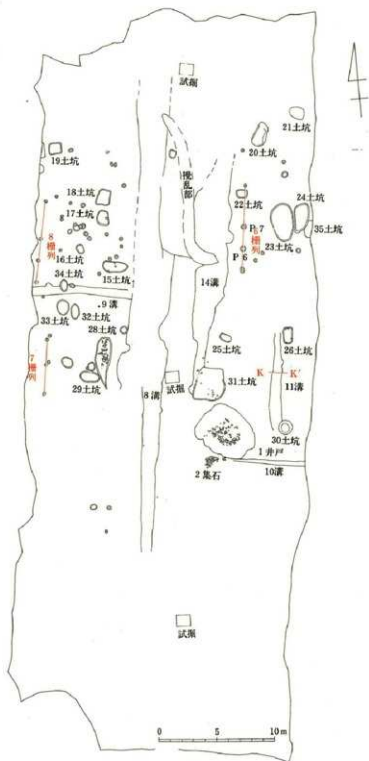
第 4 図 遺構配置図(1 棟)



第 5 図 遺構配置図(2検)



第6圖 遺構配置圖(3換)



第7圖 遺構配置圖(4検)

第2節 遺 構

1 礎石

第1号礎石

第1検出面中央西側に位置する。礎石は小見頭大から拳大迄の石の集まりから成るが、やや大きめの石が等間隔で集まっているのも見える。周囲は黒色土が他より移入されてその中に石が込められているようで、その土厚は10~12cmであり東側列のC-C'で特に目立つ。ここは鉄分の影響もあり、赤褐色を呈するところもある。規模は東西7.5m、南北8.3mの範囲に見られ、上面から見ると西際に長さ6.9m、最大巾80cmの凹みがあるが、余りに浅い為か、断面では観察できない。なおこの1号を調査中に上部を確認した平石は、4号礎石の一部と共通する。

遺物として、本址中央部より銭が1点、他に鉄製の毛抜き、陶器の皿、灯明皿等が周囲より出土している。

第2号礎石

1号の南に位置する。拳大以上の礫が4ヶ所に集合したものである。これらの周囲は最大1.5×1.4mの範囲で土色が1号同様に変化している。断面を見ても掘り方は分らず、ただ厚さ15cm程に礫が込められているのが見えるのみである。石のレベルは1号よりやや低い。

遺物は付近から茶臼が1点得られた。

第3・4号礎石

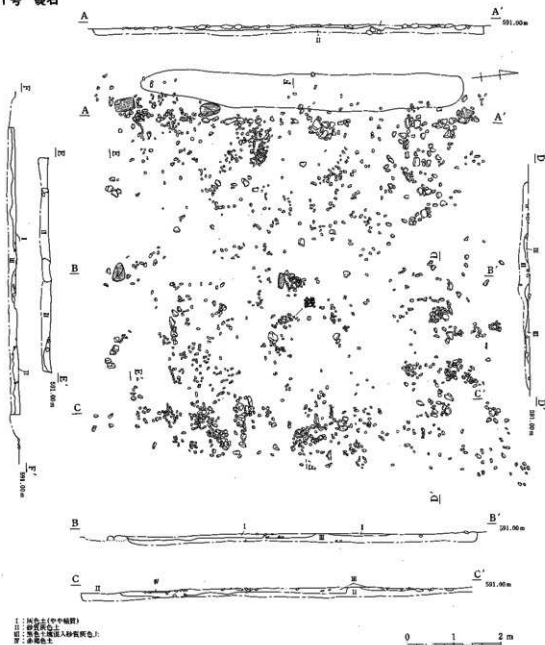
4号は第2検出面で全容をとらえている。1号より南側、東側が一廻り大きい。規模は東西6間10.7~10.8m、南北6間、13.2mである。礎石は最大50×40cmの平石で、自然石であるが、中央の1個(×)は周囲を欠き角石としていた。平坦な平石は下部に根石を入れてあるが、拳大の根石のみのものは、レベルから見て上部の平石を除去しているようである。礎石間隔は1.8mを中心として、南側は3.0mとなっている。なお、礎石を入れた掘り方を観察しても周囲の土層と全く変化が見られない。この南東部にあるのが3号である。やや大ぶりな7個の石が、たたきしめられた140×125cmのビットの中に入っている。これ1基では建物を想定することもできないが、4号に関係することも考え難い。遺物には4号から須恵器甕を見ているが、混入遺物と考えた方が妥当である。

第5号礎石

第3検出面にて拳大の石がぎっしりと詰まった2個のビットを認めた。両者とも底には大きな平石が埋められている。位置からすると、4号のX・Yの真下部に当たり、本址のビット間もX・Yと同様3.6mであり、4号のX・Yが沈まない為に石をこめたものか、あるいは、4号の業形となるものがここに存在していたものであろうか。ちなみに、X・Yの礎石上部から本址のビット底面、平石上部までは約70cmという深さを測る。

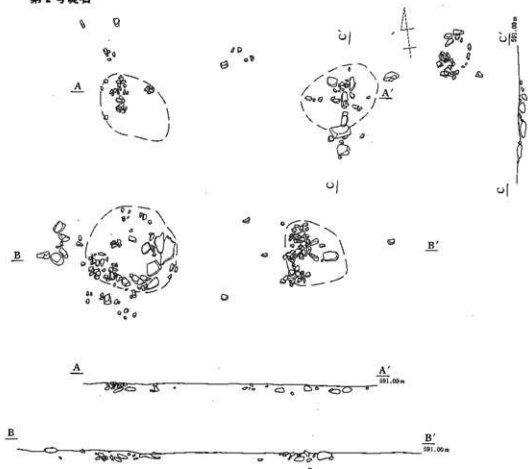
遺物としては、鉄器として釘が3点、不明品が1点ある。

第1号 礎石

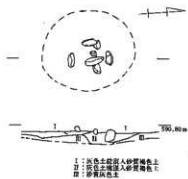


第8图 礎石(1)

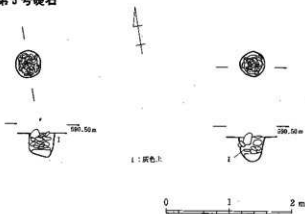
第2号礎石



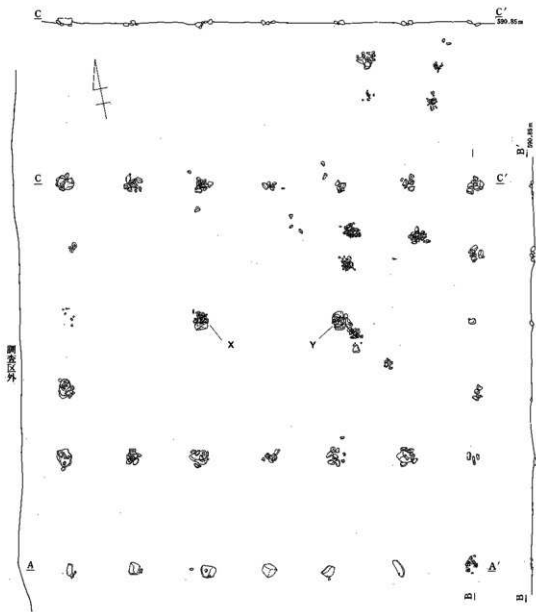
第3号礎石



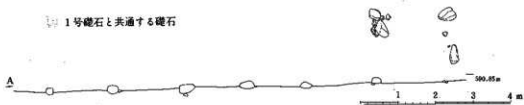
第5号礎石



第9图 礎石(2)



1号礎石と共通する礎石



第10図 礎石(3)

2 掘立・構列・ビット

掘立

1号は第1検出面北寄りに位置する。12個の柱穴より成る、総柱式の掘立である。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを示す。規模は東西2間、3.2m、南北3間、5.5mを測り、柱間寸法は桁行1.5~1.9m、梁行1.7~2.0mである。柱穴は円形ないし楕円形で、瓢箪形のもの2個ある。その規模は長径67cmから短径37cmまでの範囲にあり、深さは5~24cmと浅深の差が大きいP₁₉内には拳大の礫が約20個上部に充填されていた。覆土は灰色土もしくは暗褐色土であり、特にP₉では、両者が互層となり、マグラ文様を見せていた。遺物は全く出土せず、時期も新しいものと思うが、近世か、近代かも分らない。

2号は第1検出面中央にあり南には2号礎石が隣接する。4個の柱穴より成り、主軸方向はN-85°-Eを示す。規模は東西1間、2.2m、南北1間、1.5mを測る。柱穴は18cm×21cmと小さいもので、柱痕跡はなく遺物も得られなかった。なお隣接する2号礎石と比べると、覆土が暗灰色土を呈した本址が、新しいものと推測する。

構列

構列としては、計8棟を検出した。以下検出面ごとに見ていく。

第1検出面では、1号が北西に位置する。東側には1号掘立があり、その長軸方向と平行した構列である。ビット内には拳大の石が入っている。

第2検出面では、南北方向に2号、東西方向に3号が伸びている。両者は接してL字形となる。またこの内側には4号礎石があり、2、3号はその東・北側の礎石列に平行している。この為構列2棟は共に存在した可能性もあるが、両者のビットの個々の大きさが少し異なる為、小ビットの2号は5間、3号は3間として別々に使用されたものとも考えられる。

第3検出面では中央やや南寄りに、2間の4号、南東隅に3間の5号が位置する。

第4検出面になると、中央東側に3間の6号、西側に2間の7号、3間の8号がある。

これら各構列のビット規模は、2・5・7・8号がやや小形で、1・6号が比較的大形である。構成するビット数は3個が2棟、4個が5棟、6個が1棟を数えるが、4個のビットから成る構列のうちで、1・3・6・8号は、2間が同じ距離を保ち、1間分が遠くに位置する特徴をもっている。方向は、3号を除き、N-7°~13°-Eを指している。又これらの用途であるが、2・3号は、4号礎石と考えられる建物に対しての風よけ或いは垣根か、其他のものは共通する方向とビット配置から一連の目的と思われるがそれは全く分らない。

遺物は、6号のP₇より内耳鍋を出土する。又このP₇と横のP₆からは直径5cm位の砕かれた礫が多量に詰め込まれていた。又、これら構列の所属する時期であるが、今のところすべて中世以降としか言いようがない。

ビット

ビットは第1検出面から第4検出面まで計165個を調査した。このうち48個が掘立、棚列として組まれている。検出面では第3面の南東部に多く集まり、それらは地区外へも広がっていくようすである。図示したビットはいずれも第3検出面からのもので、骨を出土した1号、焼土塊及び炭化物を多く含む2・3号である。これらは、ビットと分類した中では大形のものである。

出土遺物では、1号出土の骨は馬の左中足骨と断定され、南4mの所の土坑10号床面からも同様な骨が出土していた(註1)。1号からは他に土師質土器の皿片を得ている。遺物より見てもこれら大形のビットは土坑と同様の使用、用途をもっていたと考えられる。又、時代については中世以降、近代までを含んでいよう。

註1 信州大学医学部第2解剖学教室 西沢寿晃氏 御教示

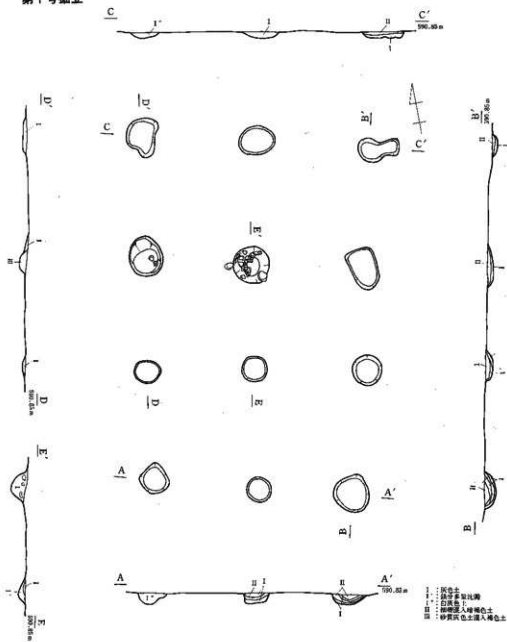
第1表 掘立一覧表

No.	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)				柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見		
	柱配り				No.	長径	短径	深さ					
1	長方形 楕柱式	N-10°-E	2間×3間 3.2×5.5	桁1.5-1.9 梁1.7-2.0	8	60	58	17	円形		(第1検出面)		
					9	40	39	18	円形				
					10	49	45	18	不整形				
					11	41	37	5	円形				
					12	65	55	10	楕円形	二段底			
					13	62	52	8	不整形	瓢箪形			
					14	57	47	12	楕円形				
					15	65	37	15	不整形	瓢箪形			
					16	67	46	9	不整形長方形				
					17	49	47	12	円形				
2	長方形 側柱式	N-85°-W	1間×1間 1.5×2.2	桁1.5 梁2.2	20	21	20	11	円形		(第1検出面)		
					21	20	18	5	円形				
					22	20	18	8	円形				
					23	21	20	8	円形				

第2表 楕円一覧表

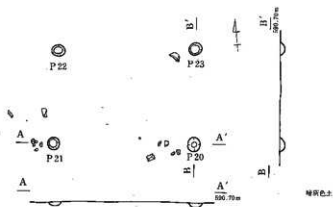
No	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)				柱穴平面形	柱穴備考	備 考
				No	長径	短径	深さ			
1	N-10°-E	3間 6.3	1.8~2.7	24	55	47	24	不整楕円形		(第1検出面) ビット内蔵多い
				25	55	50	19	円 形		
				26	53	45	22	楕 円 形		
				27	50	40	18	楕 円 形		
2	N-7°-E	5間 10.1	1.4~3.6	28	27	25	7	円 形		(第2検出面) 3号と併存か
				29	29	25	9	不整楕円形		
				30	32	30	12	不 整 円 形		
				31	30	29	9	円 形		
				32	29	25	11	円 形		
				33	25	22	7	不整楕円形		
3	N-81°-W	3間 8.8	2.2~4.4	34	45	43	10	不 整 円 形		(第2検出面)
				35	40	37	9	円 形		
				36	45	41	8	楕 円 形		
				37	36	35	9	楕 円 形		
4	N-12°-E	2間 4.3	2.1~2.2	38	41	35	5	円 形		(第3検出面)
				39	37	35	8	不 整 円 形		
				40	47	41	10	楕 円 形		
5	N-7°-E	3間 6.8	2.2~2.3	41	42	36	11	楕 円 形		(第3検出面)
				42	32	30	6	円 形		
				43	39	33	14	楕 円 形		
				44	39	37	21	楕 円 形		
6	N-8°-E	3間 7.2	1.8~3.5	45	58	40	8	楕 円 形		(第4検出面) 砕礫多量 P ₁ より遺物
				6	50	45	38	円 形		
				7	46	44	22	円 形		
				46	38	25	21	楕 円 形		
7	N-9.5°-E	2間 4.6	2.4~2.2	47	36	25	17	楕 円 形		(第4検出面)
				48	25	22	13	円 形		
				49	27	25	7	円 形		
8	N-13°-E	3間 6.9	1.8~3.2	50	30	26	10	円 形		(第4検出面)
				51	28	26	5	円 形		
				52	30	28	22	楕 円 形		
				53	30	26	14	楕 円 形		

第1号掘立



第11图 掘立(1)

第 2 号掘立



第 1 号槽列



第 4 号槽列



I : 黄褐色土混入黑色土
II : 小礫混入黄褐色土
III : 黄褐色土混入黑色土

第 5 号槽列

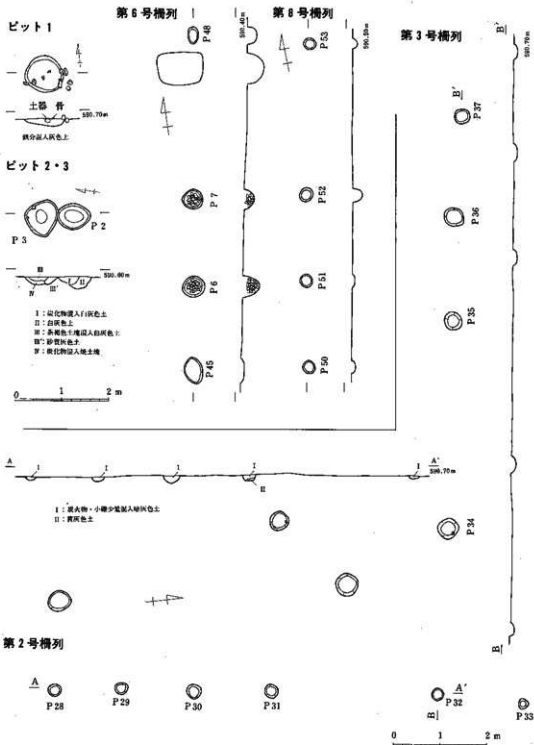


第 7 号槽列



0 1 2 m

第12图 掘立(2)・槽列(1)



第13図 横列(2)・ビット

3 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構

第1号検出面北部に位置する。覆土は、炭化材、焼土、石等を多量に混ぜたしまりのない土で、その上部に褐色、黄褐色土が、これらを覆うようにして置かれていた。これらの炭化材は、西部と東部を中心としてほぼ全体に見られる。焼土は塊状となり、ゴロゴロとして炭化材と共に散在。石は小児頭大のものが鋭く割れて、点々と集まりながらやはり全体に見られた。これらを除去すると西側には両方から2本の溝が合流し、更に北東へ曲がり今の宮沢へ合流する。東側部分では、宮沢へ向かってゆるやかな傾斜が出現した。このような状況からすると、北の斜面を利用し、建物の材を燃やしその上部に土を置いて平坦にした事がうかがえ、遺構としては、まず溝があり、後にその溝と斜面を利用した大きな廃棄地であるといえよう。

遺物は多く、総量の3割程がこの場所から出土した。これらは炭化材、焼土塊の中からもあるいは上に置かれた褐色土中からも得られているが、上記のような検出状況であり溝に伴うものでもなく、一時的に一括投棄された遺物と考えた方がよい。これらの遺物には、やきものとして陶器の灯明皿を中心に、香炉、皿、碗、広口壺、花瓶など、紅土などの磁器があり、上部壺土中からはガラスのホヤも出土、他には、鉄製の角釘、銭などもある。これらは、18、19世紀の遺物で、遺構は19世紀のものとする。

4 土坑

土坑は34基のうち、33基を調査した。それらは第3号検出面10基、第4号検出面20基、他に第1・第2号検出面で計3基である。特徴的なものをいくつか拾ってみる。1号は第1号検出面、2号溝際に位置する。内部は鉄分の沈澱が目立ち、覆土中からは銭1点の他、破壊した屋根瓦が多量に出土した。6号は第3号検出面中央西側にある、12号溝の上部である。床面までは浅いが遺物は多く、陶器類、軒瓦などがある。10号からは馬の左中足骨を出土した。北にあるP₁にも同様骨が1点あり、鑑定によると同一馬のものという。15号は第4号検出面にある。位置的には、上記の10号、P₁にごく近い。自然堆積の様子を見せているが、陶器、皿、刀子、凹石が出揃っている。27号は第4号検出面中央東側にある。灰色土の覆土中には拳大以上の石が多く、割れた石の他、鉄線なども目立ち、これらの投棄場所か。なお、遺物には釘、煙管なども見られる。28号は平面形は涙滴形を呈する。礫を覆土中に多く含み、遺物には、内耳鏡、染付碗などがある。30号は平面形は円形、断面は逆台形の端正な遺構である。南北に流水していた11号溝上にあり、検出面には丸い木が残っていた。途中は腐っているが、床面まで通し、木の底にあたる部分は堅い。ここからは煙管1点を得ている。

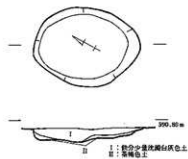
これらの時期としては遺物より見て、古いもので13・28号（15世紀）であり次に15号（16・17世紀）が古く、他には1号が18世紀、6号が19世紀という時代を与えることができそうである。

第3表 土坑一覽表

番号	平面形	規 模(cm)	長軸方向	遺 物	備 考	検出面
		長径×短径×深さ				
1	不 整 円 形	275×235×?	N-15°-E	やきもの、銭	瓦多出	1
2	楕 円 形	168×125×22	N-28°-W			1
3	不整楕円形	195×179×18	N-10°-E			2
4	不整楕円形	115×58×9	N-88°-E			3
5	不整楕円形	182×132×85	N-45°-E			3
6	円 形	203×198×18	N-10°-E	やきもの	12溝より新	3
7	円 形	134×119×12	N-79.5°-E			3
8	不整楕円形	112×97×19	N-26.5°-E			3
9	楕 円 形	176×(134)×29	N-6°-W	土器	一部調査区外	3
10	不整長方形?	(271)×122×25	N-76°-W	馬骨	" 6溝より新	3
11	方 形	113×101×48	N-89.5°-W		小ビットあり	3
13	不 整 方 形	123×120×33	N-11°-E	土器	P ₂ 他Pより旧	3
14	長 方 形	118×59×17	N-82°-W			3
15	不整楕円形	213×94×20	N-78.5°-W	やきもの、鉄器、石器		4
16	楕 円 形	81×61×31	N-14°-W			4
17	不 整 円 形	129×104×38	N-10°-E			4
18	不整長方形	141×115×20	N-21°-E			4
19	方 形	112×98×20	N-89°-W			4
20	不整楕円形	213×118×27	N-21°-E			4
21	不整楕円形	137×103×11	N-61.5°-W			4
22	長 方 形	98×70×50	N-85°-W			4
23	楕 円 形	320×138×41	N-4°-W			4
24	不 整 形	258×136×30	N-6°-E			4
25	楕 円 形	97×57×19	N-59°-W			4
26	長 方 形	140×83×46	N-2°-E			4
27	不整楕円形	358×255×89	N-25°-E	鉄器	砂礫多量混入	4
28	不 整 形	378×129×28	N-15°-E	やきもの	礫を含む	4
29	楕 円 形	166×98×11	N-79°-W			4
30	円 形	119×115×72	N-15°-E	鉄器	11溝より新	4
31	不 整 方 形	303×270×16	N-78°-W		14溝と新田不明	4
32	楕 円 形	129×73×10	N-4°-W			4
33	不整楕円形	139×101×21	N-11°-W			4
34	楕 円 形	98×70×8	N-7.5°-W		9溝より新	4
35	楕 円 形 ?				一部調査区外 未掘	4

12は欠番

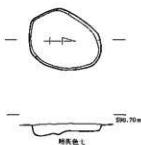
第2号土坑



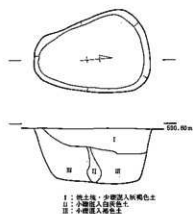
第4号土坑



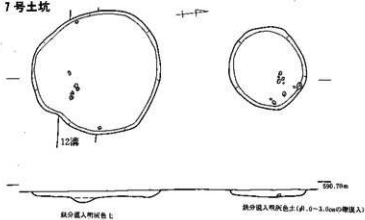
第8号土坑



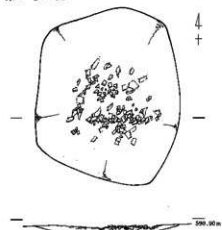
第5号土坑



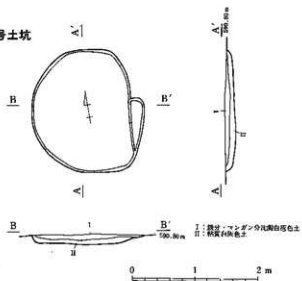
第6・7号土坑



第1号土坑

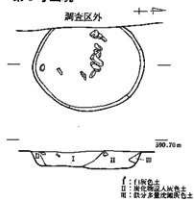


第3号土坑

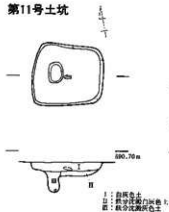


第15图 土坑(1)

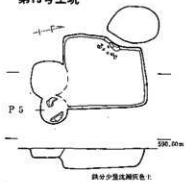
第9号土坑



第11号土坑



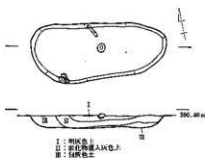
第13号土坑



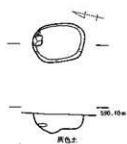
第14号土坑



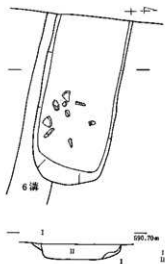
第15号土坑



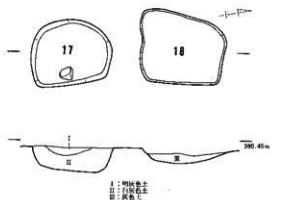
第16号土坑



第10号土坑

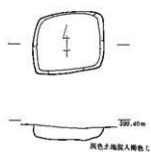


第17·18号土坑

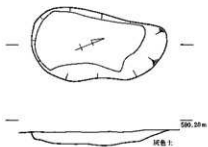


第16图 土坑(2)

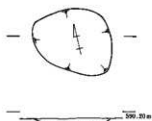
第19号土坑



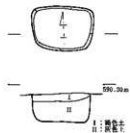
第20号土坑



第21号土坑



第22号土坑



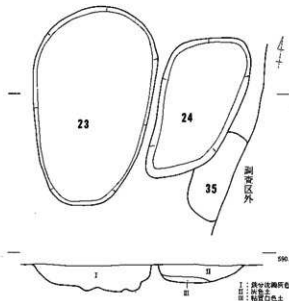
第25号土坑



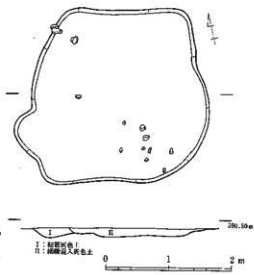
第26号土坑



第23·24·35土坑

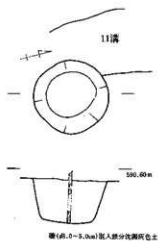


第31号土坑

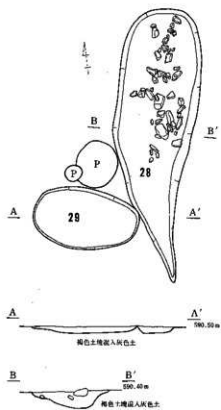


第17图 土坑(3)

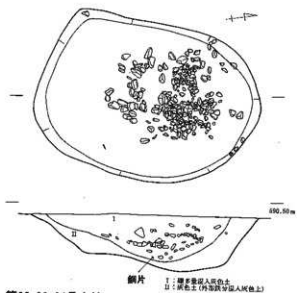
第30号土坑



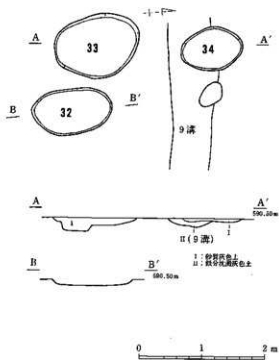
第28·29号土坑



第27号土坑



第32·33·34号土坑



第18图 土坑(4)

5 井戸

第4検出面の中央に検出した。上部は自然礫を周囲に置き、下部には桶状の円形木組が見られた。検出面上には拳大～小児頭大の石が、内径1.5m、外径2.7mのドーナツ状の中に巡るように配置するが、内側は、井戸内部へ崩れ込むように低くなっている。北側には石も少ないようで、特に組んだり、配したりした様子はない。掘り方は検出面で5.0m×3.9mと楕円形を呈し、下部3.9mまで掘り込まれていた。掘り方底部には直径85～92cm(A)の桶様の枠組が埋設されて、その上部にもAよりやや大きなBがあるようだ。そしてAの下部には直径53cmのCが埋設されている。これらの枠組は桶の底板を抜いたようなものである。枠組の板は、厚さ0.5～1.0cm、板巾7～8cm長さ60cm(A・B)板厚0.3～0.5cm、長さ25cm(C)を測る。これらの板は、桶のようにぐると丸くなり、周囲の上へはばりついているが、廻りをタガで締めたり、或いは竹釘などで止めたような様子は観察できない。しかしAの井戸桶下部内側には拳大以上の礫がぐると桶を押さえるようにして巡っている。この辺は埋土も砂礫層となり、鉄分の沈澱も多い。小さな空間も所々に見え湧き水があったことを示している。さらに下部のCの井戸桶内は、粘質土を含む砂質褐色土となり下底は砂礫質暗茶褐色土となる。なお、調査時には、全く出水などはなかったが、内部上層から、当時の湧水面を予想すると、鉄分沈澱のもっとも濃いレベル、Bの井戸桶下部の辺でなかったかと思われる。土層から埋没状況を観察すると、上部は自然埋没の様子を示している。なお、遺構が深かった為、途中重機にて削った。その為、上部から井戸桶までの様子や、Bの井戸桶の詳細について観察できなかったが、大きな井戸材などは見当らなかった。

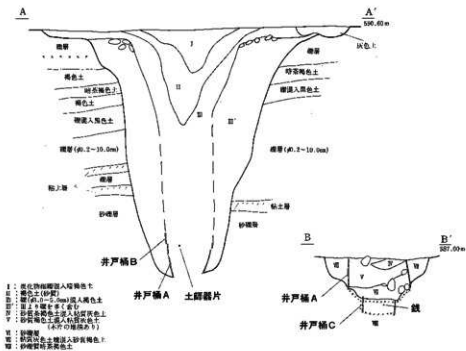
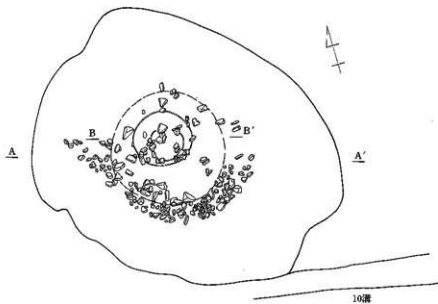
遺物では上部から内耳、土師質土器、陶器、磁器などがあるが、いずれも小片である。下部からはやはり同種の遺物と剥げ落ちたような井戸桶の枠板の木片が多数、それに漆器1点、砥石、他には寛水道宝が1点井戸の最深部より出土している。尚やきものから本址の時期を求めると、17世紀後半の陶器碗であり、その頃のものと考えたい。

6 集石

1号は第1検出面中央東側に位置する。ここに見られる石は自然石で、その大きさは西側にある1号礎石に使用されている石よりも、少し大きいものである。範囲は南北7m、東西3mの範囲に集中するが、石は組まれたり積まれたりはしていない。又、周囲には落込みも見当らない。

遺物には陶器が数点ある。出土状況も石同様のあり方である。このような状況からすると、4号礎石に使用したような石を平坦なこの場所へ廃棄したのであろうか。

2号は、第4検出面井戸の南際にある。110×70cmの範囲に拳大以下の砕石が集まっている。これも1号同様に掘り方は明瞭でないが石は重なってややうず高くなり、凹地らしきものがあつた事がわかる。なおここから東に10溝があり、井戸際であることも考え合わせると井戸からの水の流し場のような施設を想定できる。尚、ここからの遺物はない。



第19回 井戸

第2号集石



第1号集石



第1号沟



I: 炭化物・泥上少量混入緑灰色土

第2号沟



細分化腐植質灰色土

第3号沟



第4・5・8・13号沟



I: 灰色土



腐植入鉄分比腐植灰色土



I: 灰色土
II: 鉄分比腐植灰色土

第7号沟



灰色土



第11号沟

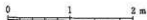
I: 鉄分比腐植質灰色土
II: 灰色土
III: 褐色土
IV: 砂礫



I: 灰色土
II: 鉄分比腐植質土



I: 白灰色土
II: 鉄分比腐植質土



第20回 集石・溝

7 溝

溝は第1検出面以下第4検出面まで、検出面毎に、3本、3本、4本、4本の計14本を検出した。これらを概観してみると、第1検出面の1・2号は現水田区画に符合しており、小堰と思われる。1号が引水の川上に当たり、2号が払い口の上側に当たろうか。3号は、水路が砕石でぎっしりと埋まっている。南側の水田に使用後廃絶したものと考える。

第2検出面の4・5・13号は南北に長いが、4号礎石の南側で止まり4・13号は西へも伸びている。水を伴ったものかもはっきりせず、これらは一体何の為の溝であろうか。

第3検出面では、8号が出現する。これは南北に長く、もっとも大規模なものである。更に下面にはこれに併行する14号があり、明瞭には分らない乍らも、浅いが広く凹地を形成していた事を見せている。12号は下面の10号と同位置にある。井戸用の水路であろう。

第4検出面では、中央東側に11号がある。これは底面のようにすから見て、北から南へと水が流れたことを示している。3・4両検出面を照合してみると、西に6・9号、東に7号が位置する。これは、1・2号のような、ある時期の水田への入、排水路と考えられる。

遺物については、4号溝から染付の皿を得ている。尚時期については、資料に乏しく言及できないが、多数存在する事を考えると、短期間でつくり替えていったことを示している。

第4表 溝一覧表

No.	検出面	位置	切合	方向	最大長 (m)	最大中 (cm)	深さ (cm)	断面形	備考	遺物
1	1	1号礎石北側	なし	東西	(18)	60	12	舟底・皿状	水引き埋か	
2	1	道路際	道路下	東西	(9)	20	10	舟底	水抜き埋か	
3	1	2号礎石西	道路より新	東西	(6.4)	20	18	U字	東側は止まる石で充填	
4	2(3)	4号礎石南	5号溝より新	南北-東西	(24.4)	200	35	舟底・U字	北側は止まるT字形	礎石
5	2(3)	4号溝東	4号溝より旧	南北	(21.4)	70	40	舟底	北側は止まる	
6	3	中央西側	10坑より旧	東西	(6)	70	?	?	東側は止まる	
7	3	中央東側	なし	東西	(8.2)	30	7	U字		
8	3(4)	中央部		南北	(21)	180	35	U字	北側よく分からない	
9	4	中央西側	34坑より旧	東西	(8.4)	70	7	U字	8号溝と合流するか	
10	4	1号井戸際		東西	(6)	40	5	U字		
11	4	中央東側	30坑より旧	南北	8	100	10	皿状		
12	3	中央東側	6坑より旧	東西	(5.6)	50	18	U字	10号溝と同一のものか	
13	2	4号溝の内側		南北-西	9	80	20	U字	L字形	
14	4	中央部	31坑	南北	18	300	?	皿状	8号溝と平行するか北側よく分からない	

第3節 遺物

1 土器・陶磁器（第21図～第27図・第5表）

遺構検出面1～4までの間で出土した遺物は、土師器95点、須恵器24点、灰釉陶器4点、土師質土器235点、陶器339点、磁器127点、瓦および瓦質陶器46点、石器1点のほか石墨など数点があり、合計は908点になるが主体は陶磁器である。時期的には15世紀頃の内耳鍋が古く、ほかに江戸末期頃の陶磁器が多く、新しいものでは明治以降のものも出ている。器種は内耳鍋・灯明皿・台脚付灯明具・碗（飯茶碗・茶碗・天日茶碗）・皿・香炉・鉢（捏鉢・摺鉢）・花瓶などがあり、遺構が寺院址ということからみれば、案外仏具の類が少ない点が指摘される。

ここでは遺構ごとに出土遺物の記述をする。灯明皿については多量にあるので、共通項目をまとめておきたい。灯明皿として扱ったものは陶器の皿で、そのほかに土師質土器の皿も灯明皿としての使用が考えられるが、所見では土師質の皿がすべて灯明皿として使用されたものとは言えない面もあるため、単に皿として扱った。次に台脚付灯明具であるが、これも灯明皿の一種ではあるが、台脚付灯明具という名称があるので、灯明皿からはずした。

灯明皿は便宜上次のように分類し、灰釉をⅠ、鉄釉をⅡとし、かえりのつくものをa、つかないものをbとした。共通事項は、調整は底部は糸切り底、外面は回転へうけずり、産地・時期については不明であるが、地元窯のものも入っていると思われる。時期は江戸時代後半ではないかとみている。

なお、陶磁器については愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏にご教示願ったが、在地産を含めて筆者の判断で記述したので、誤りがあれば筆者の責任である。ご教導をお願いする次第である。

礎石1～5 1～3は周辺も含めて礎石からの出土遺物である。1は灰釉のかかった輪はげの皿で、付高台で、美濃大窯期のものである。2は灯明皿でⅠ-aである。器高が低く胎土が軽い。地元窯の製品ではないか。3は軒先瓦で連珠付三巴文である。瓦は4点取り上げたが、いずれも江戸時代後半のものともみている。4は礎石4より出土した須恵器の大甕の頸部破片で、厚手であるが胎土には白色・黒色の小粒を含んでいる。外面には4cmピッチの大きな波状文をめぐらしている。焼成はややあまく一般的な須恵器から比較すると柔らかな感じがする。破片全体が摩耗しているので、流されてきたものではないか。時期は平安以降であろう。

竅穴状遺構1 ここからは全体の1/6の遺物が出土している。5は薄緑釉の香炉で1集石からの出土片と接合されたものである。口縁は玉縁状でやや腰がはる。瀬戸美濃の19Cのものかともみたが、在地のものとも似ている。6は土師質土器の皿であるが、黒色を呈し、厚くざらついた器面をしている。灯明皿として使用されたものであろう。後述の類似品とともに破片を含めると、計10点がある。7～9は碗で、7は犬目の碗で黒色の釉が梨地状になっている。口径9cm弱の小振りのもの

である。瀬戸美濃の19 Cのものである。8は灰釉に化粧土と型紙スリ絵ゴスで梅花を描いたものである。関西系の19 Cのものである。9は濃茶褐色をした碗で、高台内にも釉をつけている。高台は低く、小さい。産地等不明である。10は1と同様の輪はげの灰釉皿で削り出し高台である。見込みは窪んでいる。瀬戸美濃の17 Cのものである。

11~23は灯明皿で、11~13・15~18がII-b、14・19・20がII-a、21~23がI-bである。灯明皿の図示した16点の計測平均値は口径・底径・器高の順に記すと、I-a(2点)は10.2、4.25、1.45 cm、I-b(4点)が9.88、4.03、2.1 cm、II-a(3点)は9.03、3.65、1.2 cm、II-bは10.06、4.31、2.04 cmである。参考までに土師質土器皿(4点)は9.63、6.03、2.43 cm、台脚付灯明具(3点)は5.47、3.43、4.7 cmである。I-aについては後出のおりにふれるとして、I-bでは23は厚手である点48と似ているが、腰から底部にかけて釉をふきとってあり、内面には米粒ほどのトチン痕がついている。23・24は軽いもので、24のほうが貫入が細かい。

II-aでは20が黒色、他は茶褐色で、14が口径7.2 cmと小さい。かえりには小孔をあげ、油が皿に溜るようにしてある。20は口縁部が欠けているので、口径はわからないが、かえりが1.3 cmと高い。底部は切り離したあとで調整している。II-bでは11が茶褐色のほかは黒色であるが、二次焼成を受けているものがあるので、変色しているものもあると思われる。細部についてみると7点とも相違点がある。底部まで丁寧に調整してあるものは12・13・15で、22は底部のほうが低くなっている。13は底部が小さく、21は底が厚い。12・15は重ね焼きの痕が残り、13は小さいトチン痕が3点ついている。

24~26は灰釉の同一の香炉3個体分で、25はやや深いものである。24は口径14.6、器高7.0 cmで、胴部には丸のみで幅7 mm内外に縦に削っている。底はロクロ成形後、1 cmほどのつまんだだけの粘土を3箇所付けて、脚としている。瀬戸美濃の18 C前半までのものである。

27は灰釉の広口甕で、推定口径29 cmあまりに対しては器壁は6~7 mmと薄い。縁は直角に折れて幅広く、短い頸部は真直に下がって、以下急にすぼまる。瀬戸美濃18 C後半のものともみている。28は染付の文字を書いた茶碗である。瀬戸美濃産ともみているが、在地ものとも似ている。29は口径3.8 cmあまりの紅皿で、輪花状になっている。白釉である。30は焼土中から出土したもので、焼締めの花瓶で三部分に割れて、全体の様子がよくわからないが、フラスコ状の頸の長いものとなるらしい。厚手で堅緻な焼成であり、頸部には把手がつき、下部は輪状にロクロ引き上げ痕を強く残して文様としている。産地・時期等不明である。

井戸 31は京焼風陶器で、内面には桜閣風山水文らしいものが描かれている。産地は肥前ほかで、17 C後半の製品である。32は口縁に太い陰帯のめぐる甕である。口唇はほぼ水平であるが、僅かに外側が高い。暗褐色の内外面はよく磨かれている。産地等は不明である。33は四角い水滴である。上面には草花文を陰刻し、部分的にゴスを塗っている。肥前のもともみられる。

土坑1~34 34は小形の甕か壺の底部で、内面に厚く灰釉が溜って、薄緑色を呈し、外面は高

台内も含めて、茶褐色の釉がかかり、その上に黒色の釉が垂れている。瀬戸の18Cの古い方に位置づけられる。35は棟瓦である。36~40は土坑6出土のもので、36は灯明皿でI-aである。口径は10.5cmで平均的であるが、器高は1.5cmと低い。かえりには5mmの油流しの孔があいている。前出2とくらべると胎土が灰白色で重く、体部外面に丸味をもっている。

37~39は台脚付灯明具で、38・39は多少の大きさの違いはあっても、胎土・釉とも全く同一である。芯立部は筒状のものを1cm弱残して椗に二分し、円形部を上にして坏部に接合している。底部は糸切り・露胎で、中央に穴があいており、縁は面取りをしている。台脚はいずれも短い。産地は不明である。37は胎色かかった釉で、前2点より小振りである。胎土も前者より粗い。台脚の外縁から底部が露胎である。産地は瀬戸美濃で19Cである。

40は軒瓦で菊の文様である。十六弁の菊花文は明治2年に皇室の紋章に制定されるまでは、自由に使われており、特に神社には多く使われている。

41は9土坑出土の灰釉陶器の碗で、全面が磨耗しているので、須恵器・土師器と同様に流れこんだものであろう。10C代のものである。42は13土坑出土の内耳鍋で、口縁部と腰部にヨコナテ痕があり、体部外面には粗いヨコナテと部分的にタテナテ痕が残っている。口縁部は面取りをしてあり、口縁下部内側にはつよい稜線がある。底は砂底で平底である。15Cころのものであろう。43・44は15土坑出土のもので、43は志野皿片で灰色がつよく、高台は痕跡的に低い。瀬戸美濃の16Cのものである。44は織部の皿で段をもって開いている。口唇は内湾する。腰部から高台にかけては露胎である。見込みには鉄釉の線がある。瀬戸美濃の17Cのものである。

45・46は28土坑出土のもので、45はほぼ直線的に開く口縁部で、15Cころのものである。46は染付碗で草文が描かれている。口径は10.6cmで器壁は2~4mmと薄い。産地は瀬戸美濃と思われるが、存地ものとも似ている。

集石1・2 47は灰釉皿で底部中央が下がって、見込みが釉だまり状になって、重ね焼きのあとが残っている。登窯期のものである。48は灯明皿でI-bである。

溝1~12 49は4溝出土の染付皿である。文様は草状であるが粗い書き方でよくわからない。産地等も不明である。

ビット 50はP1、51はP7(6号権列)出土で、50は土師質土器の皿で、一部が黒色を呈している。灯明皿としての使用が考えられる。51は内耳鍋の耳部で、丸味をもって開く口縁部である。時期は内耳鍋を15C頃とみている。

検出面1~4 遺構に属さず、検出面としてとりあげたものである。52~58は第1検出面出土のものであるが、52・53は第1・第2検出面出土破片が接合したものである。52は京焼風陶器で、きっちりとした削り出し高台で、高台内には「清水」の刻印がある。高台が露胎のほかは細かい貫入の入った黄白色の釉で、外面には山水文らしいものがゴスで描かれている。産地は肥前ほかで、17C後半のものである。53は染付の角皿で外縁には只を描いている。産地等は不明である。54は灰

釉がかっているが、52とまったく同じもので、高台内に「清水」の一部が刻印されている。55は鉛色釉の碗で、腰以下が露胎である。高台は直に高く、高台内は中央が盛り上がっている。産地は瀬戸美濃以外である。時期は18C末である。56は色絵の碗であったが、二次焼成のため色絵部分がぬけて、その痕が器面の艶のなさと、貫入の疎密で判別できる。碗は灰釉の浅日のもので淡黄白を呈している。関西系の19C代のものである。57は鉄釉の摺鉢で日の付けたが粗い。底部は糸切り痕を残し、腰部はケズリを加えている。58は神仏に用いる花瓶あるいはお神酒徳利の底部である。外面には高台も含めて白釉がかかり、ゴスでなにか描かれている。内面にもわずかに薄空色の釉が垂れており、内面底部は渦巻状になっている。肥前系のものであろう。

59-67は第2検出面出土のもので、59は土師器の高杯の脚部付け根部分で、杯部の内面は内黒である。古墳時代末に比定されるが、磨耗しているので流されたものであろう。60は須恵器の坏蓋で、径14.8cmを測るが、つまみは欠失している。天井部は回転ヘラケズリを行っているが、胎土に小砂粒を含むこともあって雑なつくりになっている。8C代のものである。61は土師質土器の皿で、口径は9.9cmで厚いざらついたものである。底部は糸切りで、胎土は明褐色である。前出6と同様のものであるが、灯明皿としての使用痕はない。62は灰釉の見込みに印刻花纹のある皿で、高台は低く削り出している。高台内には重ね焼きの痕が残っている。美濃大窯の16C代のものである。63は鉄釉で草文を描いた織部の皿で、口縁は強く立ち上がり、外面は低い削り出しの高台と二本の稜を残している。瀬戸美濃の17Cのものである。64は花瓶で仏具である。全面は濃い黒褐色の釉で、上部にはところどころに白濁の釉が斑点状に施されている。器形は口縁が広がるもので、頸部と胴部の間に豆粒状の粘土を一對貼りつけている。底部は糸切り底である。瀬戸美濃産の18C末のものである。65は目の粗い摺鉢で茶褐色を呈し、腰から底部は釉を拭きとっている。産地は瀬戸であるが、時期ははっきりしない。66は白釉の碗で口はげである。19C末のものである。67は軒先瓦で、連珠付三巴文である。上部は欠失している。

68-81は第3検出面出土のものである。68は須恵器壺としたが、底部の器壁が薄く内湾する、見慣れない器形で、内面はクロク成形成、外面は削り底を残す。奈良時代以降のものである。69は土師質土器の皿で、やや深く碗にちかい。糸切り底で、胎土は粗い。灯明皿としての使用は考えられない。70は内耳鍋の上部で、口径は32.7cmである。口縁はやや丸味をもって開き、ヨコナデをしているが、胴部は緩になでている。口唇部は面取りをして水平につくられている。71は志野の皿で、口径12.6cm、器高2.6cmである。口唇端部・高台内などに鮮やかな橙色の火色をみせており、厚い白釉に粗い貫入がはしっている。瀬戸美濃の16Cのものである。72は灰釉に緑の銅釉を散らしたもので、口唇には赤茶色の火色がみえる。瀬戸美濃の16Cのものである。73は織部の皿で、内外面に草状の文様を黒色で描いている。高台は低い削り出しで、外面腰部には稜が残っている。産地・時期などは前出44と同様である。74は高台内に「清水」の印刻のある碗で、52・54と同類である。52と較べ「清水」の字が少し大きいし、字体も僅かな違いがある。75は土甌で注口部とそ

の周辺のみが残っている。胴上部には茶緑の釉がかかり、下部は露胎で煤が付着している。内面は茶褐色の無釉である。注口部は60°ちかくの傾きでつき、体部には径5mmの孔が3個あいている。産地は在地ものと思われるが特定はできない。土瓶の出土遺跡は松本市新村秋葉原遺跡・松本城二の丸御殿跡があるが、胎土・成形など同一ではない。19 C代のものである。76はしぎ蓮弁の青磁碗口縁部であるが、釉は厚いがしっかり付いていず、何箇所も胎土がみえる。胎土は陶質に近く、柔らかい。青磁はほかに1片27土坑から出ている。77は印肉入れの蓋で、ゴスで草花が描かれている。縁はつよく曲げて作っており、内面にも縁以外は釉がかかっている。瀬戸産と思われるが、在地ものにも似ている。

78~81は第3検出面埋立部出土のもので、78は小形の甕で、口縁部はつよく外側に曲がり、肩はなで肩である。内外ともにロクロ調整痕をのこす。鉛色の釉・赤味のつよい胎土などから在地のものと思われるが、この鉄釉は一般的なものであり、胎土も合致するものがないが、近隣では松本の浅間焼と似たところもある。79は仏飯器で上部を欠く。外面には白濁した釉がかかり、脚高は低く、内部にはねじり上がった痕が残る。仲野氏の観察では土は肥前産、成形は瀬戸的であるとのことである。80・81は瓦質陶器で、甕・控鉢である。80は口唇が肥厚して水平になっており、その下部に二本の太いくびれをめぐらしている。胴部は5mmあまりと薄い。断面は中心が黒色、内外面は灰白色の三層からなるが、器壁の薄いところは灰白色一層になっている。81は丸珠を帯びた口唇で、口縁には3mm幅の沈線がめぐる。内面にはロクロ調整痕が残る。

82~84は第4検出面出土のもので、82は鉄釉の碗で、見込みに円形の調整痕が段をなして残っている。高台内はゆがんで削られており、高さも一様ではない。釉も黒褐色と茶褐色とが斑になっており、梨地状の斑点がつく。産地は瀬戸美濃以外のものである。83は小形の甕で蓋物である。淡黄白の釉がかかっている。関西系の19 C代のものである。84は無釉陶器の口縁が直に立つ甕で、内面口縁に印刻花文がある。胎土はスが入っている。

参考文献

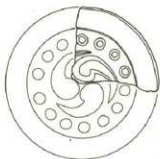
- 田口昭二「考古学ライブラリー」17 『美濃焼』 ニュー・サイエンス社 昭和58年
大橋康二「考古学ライブラリー」55 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 平成元年
田芝雄官産調査司 『印芝雄官産』 1988
仲野泰裕「江戸時代の瀬戸産と京焼風陶器」『愛知県陶磁資料館研究紀要6』愛知県陶磁資料館 昭和62年
松本市教育委員会『松本城二の丸御殿跡発掘調査・史跡公園整備』松本市教育委員会 1985

第5表 出土陶磁器一覽表

No	遺構名(出土地)	種類	器形	寸法(cm)	数量	調査地	調査文	内	外	調査地	時期	備考
1	1 礎石周壁	陶器	皿	口径 5.9	底径 6.4	高さ 1.4	灰釉	灰白	灰白	瀬戸式赤	18C	輪はけ
2	2 礎石周壁	陶器	打明皿		4.1		灰釉	灰白	灰白	瀬戸式赤	18C	在焼ものに似ている
3	4 礎石	瓦葺陶器	軒先瓦		3.2		緑釉	暗灰	暗灰	瀬戸式赤	18C	打明皿か
4	4 礎石	瓦葺陶器	軒先瓦		3.2		緑釉	暗灰	暗灰	瀬戸式赤	18C	
5	1 礎石	磁器	香炉		8.6	4.3	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
6	1 礎石	磁器	香炉		8.8	2.1	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
7	1 礎石	磁器	香炉		8.0		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
8	1 礎石	磁器	香炉		3.6		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
9	1 礎石	磁器	香炉		5.8		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
10	1 礎石	磁器	香炉		4.6		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
11	1 礎石	磁器	香炉		4.6		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
12	1 礎石	磁器	香炉		4.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
13	1 礎石	磁器	香炉		5.6		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
14	1 礎石	磁器	香炉		7.2		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
15	1 礎石	磁器	香炉		4.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
16	1 礎石	磁器	香炉		4.8		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
17	1 礎石	磁器	香炉		4.2		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
18	1 礎石	磁器	香炉		4.2		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
19	1 礎石	磁器	香炉		2.0		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
20	1 礎石	磁器	香炉		2.9		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
21	1 礎石	磁器	香炉		3.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
22	1 礎石	磁器	香炉		3.8		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
23	1 礎石	磁器	香炉		4.2		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
24	1 礎石	磁器	香炉		9.6	7.0	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
25	1 礎石	磁器	香炉		14.6		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
26	1 礎石	磁器	香炉		13.1	8.0	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
27	1 礎石	磁器	香炉		28.9		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
28	1 礎石	磁器	香炉		5.4	2.1	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
29	1 礎石	磁器	香炉		3.5	4.8	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
30	1 礎石	磁器	香炉		11.3		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
31	1 礎石	磁器	香炉		4.0		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
32	1 礎石	磁器	香炉		5.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
33	1 礎石	磁器	香炉		5.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
34	1 礎石	磁器	香炉		5.4		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
35	1 礎石	磁器	香炉		4.4	1.5	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
36	1 礎石	磁器	香炉		4.3	3.4	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
37	1 礎石	磁器	香炉		6.1	4.8	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
38	1 礎石	磁器	香炉		3.1	4.8	白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
39	1 礎石	磁器	香炉		7.0		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
40	1 礎石	磁器	香炉		21.5		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
41	1 礎石	磁器	香炉		15.3		白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	
42	1 礎石	磁器	香炉				白磁	黒	黒	瀬戸式赤	19C	

No	高橋北(鞍山所)	種別	形状	寸法(cm)	裏面模文	外面	裏面	産地	時期	備考
43	15C	陶器	皿	9.0	1.8	灰白	灰白	瀬戸灰	16C	古野
44	15C	陶器	皿	5.4	4.4	灰白	灰白	瀬戸灰	17C	織部
45	28C	土師器上器	内耳瓶	13.4	4.6	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	15C頃	古野のものに似ている
46	28C	陶器	胎付甕	5.7	4.0	白	白	瀬戸灰	17C	瀬戸とはいえない
47	1貫打	陶器	灯明皿	9.4	4.7	灰白	灰白	瀬戸灰		
48	1貫打	陶器	皿	11.6	6.2	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
49	貫	陶器	皿	10.5	6.2	灰白	灰白	瀬戸灰		
50	貫	土師器上器	内耳瓶	5.4	5.4	灰白	灰白	瀬戸灰	15C頃	
51	1貫・2貫	土師器	甕	5.0	5.0	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	17C後半	京都風陶器の水印
52	1貫	陶器	向壺	5.0	4.6	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	17C後半	京都風陶器の水印
53	1貫	陶器	甕	4.6	4.6	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	18C末	瀬戸灰と見られる
54	1貫	陶器	甕	9.4	9.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	18C末	瀬戸灰と見られる
55	1貫	陶器	甕	9.4	9.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	18C代	二次焼成で色むけ
56	1貫	陶器	花吹	9.4	9.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
57	1貫	陶器	甕	3.0	3.0	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
58	1貫	陶器	花吹	6.3	6.3	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
59	2貫	土師器	内耳瓶	2.3	2.3	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	古野系	
60	2貫	土師器	甕	6.3	6.3	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	8C代	
61	2貫	土師器	甕	9.9	5.8	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	16C	
62	2貫	土師器	甕	5.8	5.8	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	17C	
63	2貫	陶器	甕	10.8	6.5	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	18C末	織部
64	2貫	陶器	花吹	7.0	7.0	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	18C末	
65	2貫	陶器	甕	13.0	2.2	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	19C末	1貫打
66	2貫	陶器	甕	2.2	4.6	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
67	2貫	瓦葺陶器	軒瓦	9.5	6.0	灰白	灰白	瀬戸灰	奈良以降	
68	3貫	瓦葺陶器	軒瓦	32.7	6.6	灰白	灰白	瀬戸灰	15C頃	
69	3貫	土師器上器	甕	12.6	2.6	灰白	灰白	瀬戸灰	16C	外環付有
70	3貫	土師器上器	甕	13.2	6.8	灰白	灰白	瀬戸灰	16C	古野
71	3貫	土師器上器	甕	11.2	6.8	灰白	灰白	瀬戸灰	17C	
72	3貫	陶器	甕	4.3	4.3	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	17C後半	織部
73	3貫	陶器	甕	11.4	11.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	19C	京都風陶器の水印
74	3貫	陶器	甕	2.0	2.0	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		在地のものに似ている
75	3貫	陶器	甕	21.3	5.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		土は肥前竹成形瀬戸
76	3貫	陶器	甕	21.3	5.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
77	3貫	陶器	甕	13.9	5.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	不明	瀬戸系等以外
78	3貫	陶器	甕	5.9	5.9	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	不明	
79	3貫	土師器上器	甕	4.5	4.5	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰	19C代	
80	3貫	土師器上器	甕	4.5	4.5	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
81	3貫	土師器上器	甕	13.9	5.4	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
82	4貫	陶器	甕	5.9	5.9	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
83	4貫	陶器	甕	5.9	5.9	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		
84	4貫	陶器	甕	5.9	5.9	灰茶褐色	灰茶褐色	瀬戸灰		

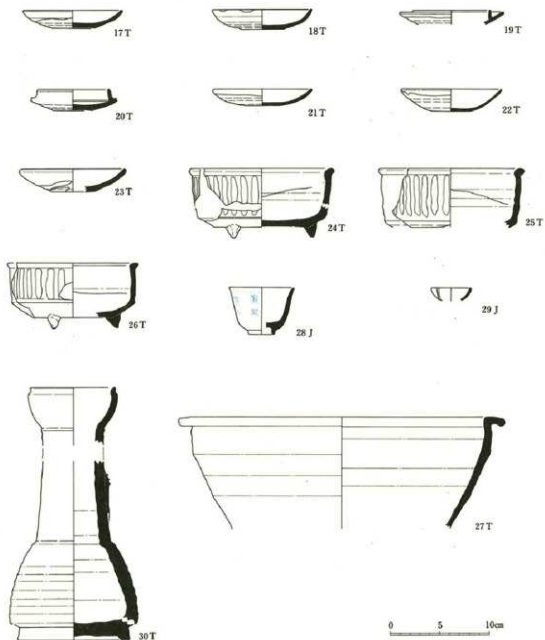
礎石



堅穴状遺構

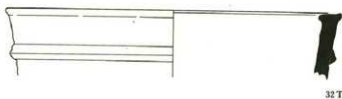


第21圖 出土陶磁器(1)

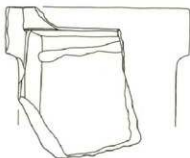
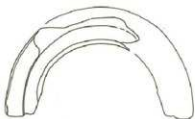


第22图 出土陶磁器(2)

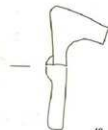
井戸



土坑



35 瓦質陶器



40 瓦質陶器

0 5 10cm

第23図 出土陶磁器(3)



41K



43T



45 土師質土器



44T



42 土師質土器



46J

集石



47T



48T

溝



49J

ビット



50 土師質土器

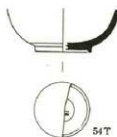
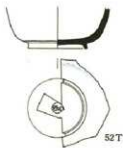


51 土師質土器

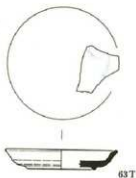
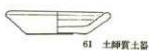
0 5 10cm

第24図 出土陶磁器(4)

第1 検出面



第2 検出面



0 5 10cm

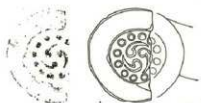
第25図 出土陶磁器(5)



65T

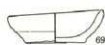


66J



67 瓦質陶器

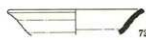
第3 検出面



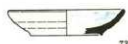
69 土師質土器



71T



72T



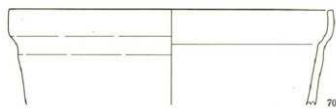
73T



74T



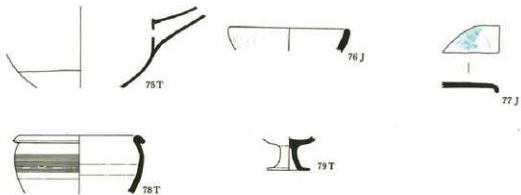
68S



70 土師質土器



第26図 出土陶磁器(6)



第4 検出面



第27回 出土陶磁器(7)

2 鉄器・銅製品

多数の金属製品を得ているが、ボルト、鉄線、鉄板などの近代遺物も多く、図化に値するものは以下の資料だけであった。

鉄製品には、釘13、刀子1、不明品2の計16点、銅製品では、煙管2、毛抜き1、不明品3の計6点、他に銭が16点である。

釘は、出土遺物の主体をなし、図化したもの以外にも多数認められたが、頭部形状の不明なものが多く、10を除いてこれらを割愛した。これらは、長さ5分から3寸、あるいはそれ以上と思われる。頭部は、すべて長方形の皿を付したものであり、装飾性を考慮したものであろう。

刀子は、両刃造り、棟部平造りのもので、莖部が、刃部長に対してやや短かい。一部木質が残存しており、刀子を入れものに収納したままであることが分かる。なお、これ以外、刀子と思われる製品は出土していない。

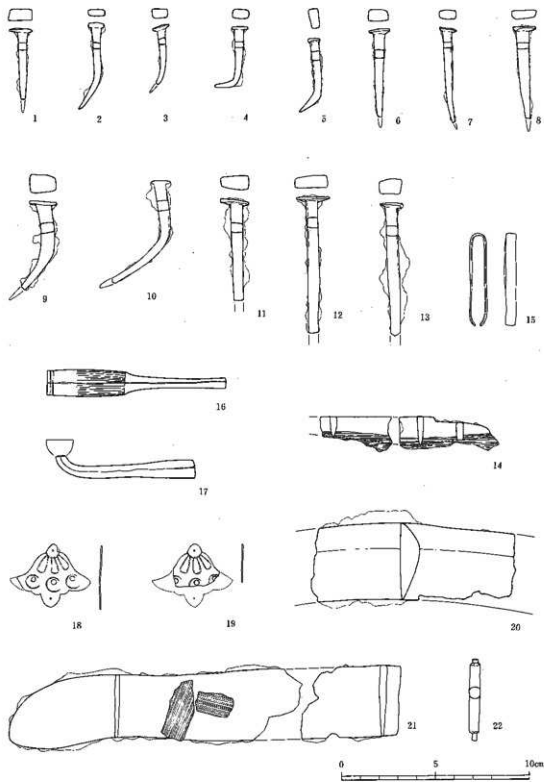
15～19は、銅製品である。毛抜きは、15が1点である。

煙管2点は、一方が吸口部、一方が雁首部のみの出土であった。16の吸口部は、肩部を明瞭にもつが狭義の吸口部と製作工程を分けていない。17の火皿を欠く雁口は、「河骨形」を保つ脂返しを有するが、既に肩部との差は明瞭でない。他に、火皿から脂返しにかけての破片が井戸より一点出土しているが、これも「河骨形」であった。なお、補強帯は消失している。

18、19は、同范品と考えられる。家具につけられた飾り金具であろうか、上下には留め具の為の小穴も見える。なお、粉々になっている為図化できなかったが、他にもう1点が同一遺構から出土している。

用途不明の鉄製品2点は、ともに大形品である。これら以外に大形の鉄製品は含まれていない。20は、両端を欠損する断面三角形の製品である。わずかに湾曲しているのが分かる。21は途中を折損する板状の製品だが、あるいは右端をも欠損するのかもしれない。一方の側縁に向かって徐々に肉薄となるが、特に刃付けされた痕跡はない。また一部に木質を残すものの、木目が不揃いであるため、原位置を保つものではなかろう。外見では、ナタと鎌のようにも見えるのだが、細部に至っては違いがある。

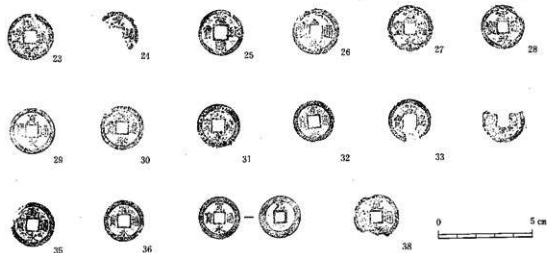
銭は、合計19点が出土している。すべて銅銭である。これらは寛永通宝を主とし、他に元祐通宝があるらしい。また状態の悪い3点は、銭種不明であった。このうち竪穴状遺構からは14点を得ている。すべて火熱を受けており、錆化と破損が激しいものである。寛永通宝も、詳しく見ると幾種類も分類できそうであるが、さきに述べたような訳で詳しくは観察できない。ただ、37は、細字で背に「元」大阪で鑄造されたものである。



第28图 铁器

第6表 鉄器一覽表

No.	種別	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
1	釘	竪穴状遺構	(3.8)		0.5	(2.0)	脚部先端欠失	
2	"	"	4.8		0.4	2.2	完形	
3	"	"	(3.2)		0.4	(1.0)	"	
4	"	27号土坑	3.7		0.4	2.1	完形	
5	"	竪穴状遺構	4.2		0.5	2.0	完形	
6	"	"	(4.7)		0.5	(2.9)	脚部先端欠失	
7	"	"	(5.3)		0.5	(2.8)	"	
8	"	"	(5.0)		0.6	(3.3)	"	
9	"	27号土坑	(4.9)		0.7	(7.7)	脚部先端欠失	
10	"	5号礎石	(6.1)		0.6	(8.6)	脚部先端欠失 頭部形状不明	
11	"	27号土坑	(5.3)		0.6	(8.0)	脚部中央以下欠失	
12	"	5号礎石	(7.3)		0.6	(8.8)	脚部中央以下欠失	
13	"	"	(7.1)		0.6	(11.9)	"	
14	刀子	15号土坑	(9.0)	1.5	0.4	(14.1)	切先欠失、木質部付着	
15	毛抜き	1号礎石	4.9	0.6	0.1	2.5	完形 青銅製品	
16	煙管	27号土坑	(9.6)	(1.4)	(0.1)	(16.2)	暖口のみ 青銅製品	
17	煙管	30号土坑	(7.4)	(1.0)	(0.05)	(4.3)	火皿欠く履首のみ 青銅製品	
18	不明	竪穴状遺構	(3.9)	3.4	0.05	(1.7)	一端欠失 青銅製品	
19	"	"	(2.5)	(2.2)	0.05	(0.7)	三方欠失	
20	"	27号土坑	(10.8)	(4.0)	(1.0)	(96.7)	両端欠失	
21	"	15号土坑	(20.8)	3.8	0.4	(73.4)	一部切損 一部木質付着	
22	"	5号礎石	4.3	0.6		6.9	青銅製品	
23		1号礎石	寛永通宝	1点				
24~34		竪穴状遺構	寛永通宝	9点	元祐通宝	1点	元○○○? 1点	不明3点
35~37		1号土坑	寛永通宝	3点				
38		井戸	寛永通宝	1点				



第29図 銭拓影

3 石器・木器

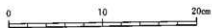
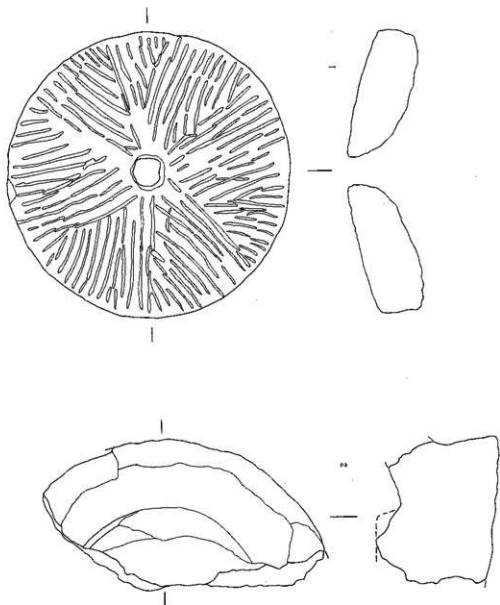
石器には臼、凹石、砥石がある。臼は粉挽き用と茶挽き用のものがあり、共に下臼である。前者は完形で、芯棒孔は貫通している。すり合わせ面及び外縁、底面は磨耗している。使用頻度の高さを示しており、斜行する溝により成形が行なわれていたことがわかる。後者の茶臼は半分程を欠する。磨耗した周囲からは、本米の受け皿が欠け更に周囲を欠いて使用したものと思われる。なお、すり合わせ面の様子は全く観察できない。凹石は凹部が片面の3、両面の4である。5は周囲に何の痕跡もない安山岩製の丸い石である。砥石は6がある。片端を欠するが、断面を見ると、一面のみ、よく使用されている。また他の三面は、原材から採取する際の切断面が小さなノコギリのような階段状の痕跡を残している。

木器としては2点ある。7は直径13cm程の幼材である。周囲には樹皮も見え、人為的な痕跡は見当らず、木の枝かもしれない。8は両端に切断面が見えている。中央部はゆるくえぐられ、裏面には樹皮も付着している。表面は加工してあるようである。用途は分らない。

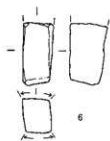
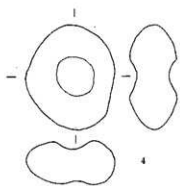
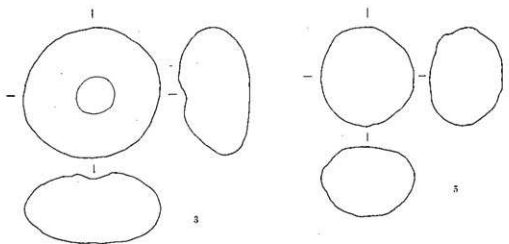
又、井戸内より出土した漆製品は1点のようである。木質部は一部炭化して、黒色と赤色の漆のみがあざやかに残っている。器の内・外面を塗り分けていると思われるが、器種までは分らない。尚、井戸下部に埋設された井戸桶はA・B・Cいずれも針葉樹である。水に強く、折れにくいという点でヒノキよりサワラと考えた方が妥当であろう。

第7表 石器・木器一覧表

No.	種別	出土地	寸法(cm)				材質	備考
			長さ	巾	厚さ	重量(g)		
1	粉挽き臼	第3検出面		30.1	7.7	6,850	安山岩	ふくみ3.5cm、芯棒孔2.8×3.3cm
2	茶臼	第2号礎石		(36.5)	(13.1)	5,500	#	すり合わせ面直径20.0cm
3	凹石	第15号土坑	14.3	13.7	7.3	1,990	花崗岩	
4	#	第3検出面	11.0	9.3	5.0	650	砂岩	
5	丸石	#	10.5	9.8	7.6	930	安山岩	
6	砥石	第1号井戸	(6.6)	(3.1)	3.6	140	凝灰岩	切断痕明瞭
7	不明	#	(20.7)	1.1	0.9			木の枝か
8	#	#	7.0	1.4	0.6			羽根状のもの



第30圖 石器



第31図 石器・木器

第4章 神宮寺について

1、古文書資料

松本市大字島立^下三ノ宮

麩寺蓬嶋山神宮寺関係史料

一、慶安四年^下二月廿七日

信濃筑摩郡出川組笹新田檢地帳

残^上百九拾九石三斗四升四合 定納

外^上(除地)

上畑 五畝廿六步 御蔵屋敷

下畑 六畝貳拾步 御蔵屋敷

中畑 壹反七畝拾五步 野々宮領

中畑 壹反六畝拾八步 神宮寺屋敷

慶安四年

二月廿七日

蘭田又右衛門 印

矢口 五大夫 印

浅岡九左衛門 印

(松本市笹部

笹部 氏所蔵
赤羽鴻一郎氏所蔵)

二、慶安五年^下正月廿四日

信濃筑摩郡嶋立組三ノ宮村檢地帳

残高百五拾石九斗三升三合

右^上外

式畝拾五步

屋敷四反五畝貳拾七步

屋敷七畝貳拾四步

屋敷壹反式畝拾五步

屋敷貳畝九步

中畑貳反三畝貳拾四步

上畑六畝步

上田九畝拾八步

上田九畝拾八步

下畑壹畝六步

定納

蔵屋敷

神宮寺

大祝

神主

神子

神宮寺

同寺

明神油免

大祝

神主

鈴免

慶安五曆

正月廿四日

伊藤七郎右衛門 印

岡江 八郎左衛門 印

細井弥三右衛門 印

(松本市松本市役所旧所蔵現市立図書館蔵
島立出張所)

三、宝永五年

鳴立組高辻物成諸上納指出張

三ノ宮村

弥右衛門

一、高百五拾式石四斗五升五合

傳助

二、屋敷四反五畝廿七步

神宮寺

三、中田式反五畝拾式步

四、中畑七反三畝廿四步

(東筑摩郡波田町三溝 百瀬幸男氏所藏)

四、宝永五年

信州筑摩郡之内

鳴立組高辻 諸色指出帳

寺領之寄

一、屋敷四反五畝廿七步

神宮寺

二、中田式反五畝拾式步

同寺

三、中田七反三畝廿四步

同寺

寺院

一、蓬嶋山神宮寺 真言宗初瀬長谷寺末寺

(東筑摩郡波田町中波田 波多腰太郎氏所藏)

五、享保六年十月

信易筑摩郡御分知高辻 諸色差出帳

安曇郡

笹部村

高式百四拾七石四斗七升四合八勺

拾五石七斗五升 百姓屋敷免

拾三石五斗 本屋敷拾八軒 老軒 付七斗五升

宛

式石式斗五升 門屋敷六軒 老軒 付三斗七升

五合宛

四斗四升

式斗三升三合三勺

九斗老升三合

宍石四斗

(以下略)

御藏屋敷老所

伊勢免

神宮寺屋敷

野々宮免

三ノ宮村

高百七拾九石式斗九升五合

七石六斗五升 百姓屋敷免組頭老軒 付九斗宛

七石式斗 本屋敷八軒

四斗五升 門屋敷老軒

式斗式升五合 御藏屋敷

拾九石五合 寺社領

十三石老斗七合 神宮寺免

五石八斗九升八合 社領

残百五拾式石四斗老升五合 御免状高

(松本市島立南栗 浜英麿氏所藏)

2 神宮寺周辺

神宮寺と呼ばれる寺は平安時代の本地垂迹説（仏が仮に神の姿をして現れ、民を救う）に基づいて山姥ある神社に建てられ、神社を監督する立場にあった。この地方で神宮寺があるのは浅間の御射神社、筑摩神社（この神宮寺は後に安養寺となる）、小野神社、麻績村の神明宮、四賀村の神明宮と、鳥立の沙田神社である。今でも残っているのは、御射神社と四賀村の神明宮のみである。今回発掘調査した逢島山普明院神宮寺は、延喜式内社である沙田神社のすぐ北隣りに別当寺として存在していた。御杖行幸の際には神主は馬に乗り、住職は駕籠に乗って出歩いていたと言われており、神主より住職の方が格が上であったことを窺わせている。この神宮寺についての、創建当時から、明治の廃仏毀釈で消滅するまでのことはほとんどわかっていない。以下、僅かに残る神宮寺の足跡をたどってみたい。古い伝承では神林の福応寺出身の法燈国師が神宮寺で修業をした(注1)と言われているが、詳細にはわからない。

神宮寺のほとんどは天台宗か真言宗である場合が多い。普明院は、長谷寺（奈良県）の末寺と言われ、寺の境内の入り口のところに光明真言の石碑が建っていることから、真言宗の寺であると推定される。この神宮寺の末寺と言われているのは、大庭の惣輪寺、永田の法性院である。惣輪寺は弘法大師信仰の寺であり、法性院は神宮寺の隠居寺と言われている。江戸時代、神宮寺の住職は永田地区の庄屋であった二村氏から養子にきており、ゆえに法性院との結びつきは強く、神宮寺住職の位牌が納めてあったり、廃仏毀釈の折には、神宮寺の御本尊が法性院へ移されたと言われていた。一方寿瀬黒の王徳寺へも神宮寺の御本尊が移っていったというようない伝承が残っている。法性院には鎌倉時代の不動明王像と江戸時代初期の厨子が残されており、神宮寺のものが移ったとも言われているが、その場合創建時期はいつになるのであろうか。

堀米地区の新田の共向墓地には神宮寺という地名が残っている。ここの供養塔には「大阿闍梨権大僧都法印秀傳大和尚の位」と神宮寺住職の名が記されている。ここに神宮寺の末堂があったとも言われている。

これらのことから江戸時代から明治時代の廃仏毀釈にかけての神宮寺の姿が僅かに窺える。

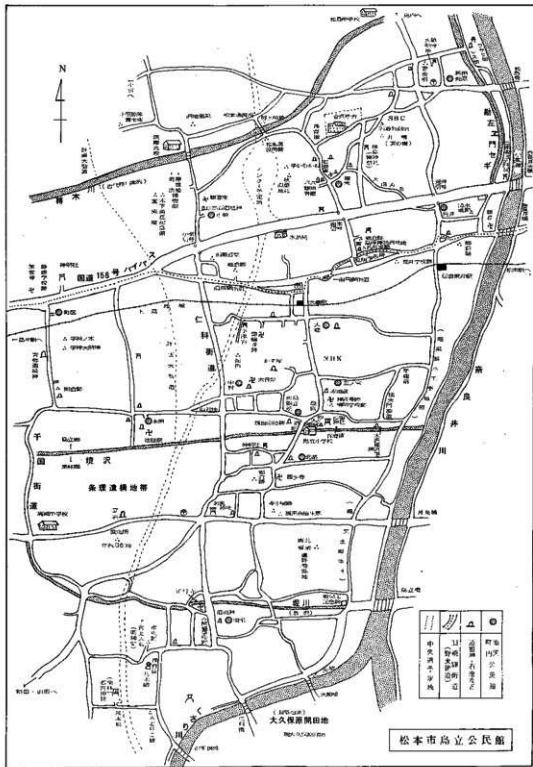
三の宮の小字名を見てみると、「寺跡」、「寺ノ北」、などがみられ、さらには「宮畑」が何カ所か見られる。慶安五年の検地帳によると神宮寺は一町歩の免租地をもっており、沙田神社にしても相当の社領をもってのことから、かなりの勢力があったことが推定できる。

註

法燈門明国師は名を覚心、号を心地と言ひ、筑摩郡神林郷に承元元年(1207)に生まれた。父は高澄和泉兼久と言ひ、神林郷の地頭であったといわれる。15歳で出家し、東大寺、高野山、鎌倉と修業を置ね、建長元年(1249)には入宗した。杭州護国寺の無門の教に影響を受けた。また、日本に本誓の臨壇法を伝えたことでも有名である。

参考文献

鳥立公民館 『鳥立乃生立』 一志茂樹先生述 (昭和43年)



第32図 昭和59年島立(史跡等)略図

第5章 調査のまとめ

今回の調査地は沙田神社の北、「寺跡」という小字名で神宮寺があったとされる所を中心に「宮ノ下」にかけての一带である。この「寺跡」は東西 55 m、南北 45 m程の広さである。調査範囲は、南北 60-65 m、東西 25 m前後と狭い場所であり、検出面を4回設定し実施した。その実質調査面積は、5,938 m²である。

神宮寺は古文書資料を見ても分かるように、江戸時代中期以降は一町歩を越える田畑を所有していたとされるが、明治3年に始まる松本藩の廃仏毀釈により、寺は跡形もなくなってその一部に元住職の住宅を残すのみである。明治6年の絵図(図版15)をみると山門と2つの建物が建っていたことが分かる(註1)。今回の調査で出現した遺構は場所から見ても、積極的に神宮寺関連の遺構と考えてみて良いであろう。絵図に見られる施設と照らし合わせると、1号礎石には南向きに2層式の建物があり、その下から出現した4号礎石は、それより大きな前段階の建物と思われる。2号礎石には山門があった。この山門までは、沙田神社の本殿前から北へ進入する参道が現在の農道にそのまま残っていた。又、絵図に見られる4号礎石の西側の建物は、金堂らしい。更にその西には、庫裡のような住宅が見えているが、これらは用地外である。井戸は絵図には載っていないが、仏前に供えた浄水用の井戸と考える。検出面も下部の為、この井戸は廃寺迄は使用していなかったものであろう。北側斜面の竅穴状遺構は廃仏毀釈の際に堂などの建物、道具類などを焼いた場所である。瓦を出土した1号土坑や雑多なものが多い27号土坑もこのような投棄坑である。又、第2、第3検出面に見られた不明瞭な埋立部は、堂宇建立に関するものか、或いは明治になっての博明学校に関する工事の跡であろう。尚北埋立部は、此頃畑地に行なった埋立である。礎石下に長く凹む8溝、14溝は何であろうか。欄列の多くがこの溝に対して平行に並んでいる。

遺物についてみると、灯明皿、碗などを主体として仏飯器などもみえているが、密教につきものの多種類の法具類が見当たらない。これは、廃仏毀釈の際にもち去られたか、或いは他の関連寺院などに流れているのではなかろうか。遺物は、時期的に見ると16-17世紀に一つの盛期が見られ、次いで19世紀代のものが続く。後者は、廃寺となった時、前者は創建された時期と考えたいが如何であろう。また昨年まで神社南、西側の調査で普遍的に見られた古代の遺物はここではほとんど見られず、延喜式内社と云われる神社の周囲でもその場所により開発の時期に大きな隔りがあることを示している。

註1 絵図では寺の建物の上に紙を貼り、既に消失したことを示している。

参考文献

松本市教育委員会 「松本市新村秋葉原遺跡」 (1983)

「松本市島立町の宮遺跡III」 (1989)

東京、松本、塩尻市郷土資料編纂会 「東筑摩郡、松本市、塩尻市誌」第2巻歴史下(昭和43)

圖 版



調査地 (北より)



調査地 (南より)



作業開始



第1検出面 (南より)



第4検出面 (北より)



発掘風景 (南より)

第1図版 調査地及び作業風景



第1号礎石 (東より)



同 (南より)



同



同



同
礎石(X)



同出土鉄

第2図版 第1号礎石



第1号炭石
西列
(北より)



同
西列
(南より)



同
西半部
(南より)



同
北列
(東より)



同
東列
(南より)



第2号礎石（南より）



第4号礎石（東より）



第2号礎石



第4号礎石



第5号礎石



第5号礎石

第4図版 第2・4・5号礎石



第1号掘立 (南より)



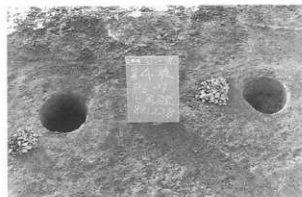
第1号掘立 P19



第2号掘立 (南より)

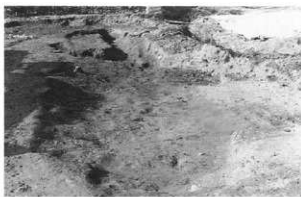


第2号掘立 (南より)



第6号掘立 P5, P7

第5図版 掘立・掘列



竪穴状遺構



竪穴状遺構内溝



同遺物出土状況



同遺物出土状況



同遺物出土状況

第6図版 竪穴状遺構



第1号土坑



第5号土坑



第9号土坑



第6・7号土坑



第10号土坑

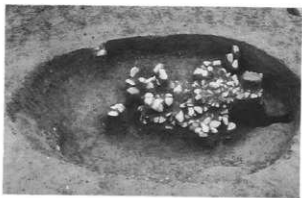


第13号土坑とビット

第7図版 土坑・ビット



第15号土坑



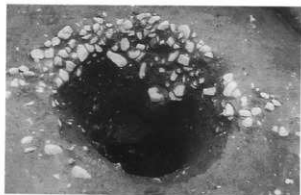
第27号土坑 罐状况



第30号土坑



第28・29号土坑



井戸(検出面)



井戸(下部井戸桶)

第8図版 土坑・井戸



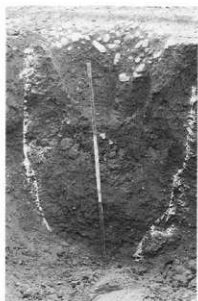
井戸桶 A



同 断面



井戸桶 A・C



井戸(掘り方)



井戸桶全容



第1号集石



第1号集石半分割



第2号集石



第3号溝断面



第5・4・13号
溝(右より)



第7号溝
(2溝下部)

第10図版 集石・溝



1. 2. 3

47. 48. 5



15. 16. 17

19. 18. 20



21. 22. 23

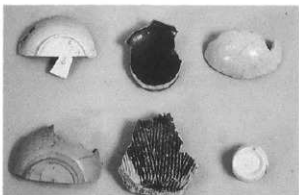
29. 8. 9. 28

第11图版 出土陶磁器(1)



40. 41. 42

43. 44. 46



52. 55. 56

54. 57. 58



4. 62. 59

66. 64. 60

第12图版 出土陶磁器(2)



70. 72. 74. 66

76. 80. 81.
78.



79. 75. 50. 69.

33

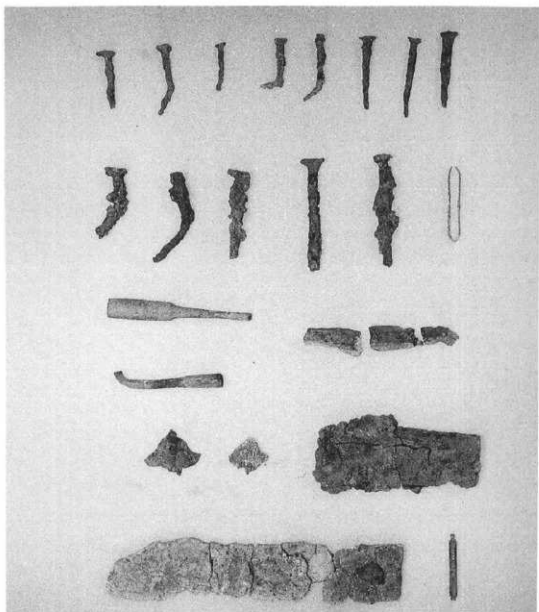
73. 71. 36



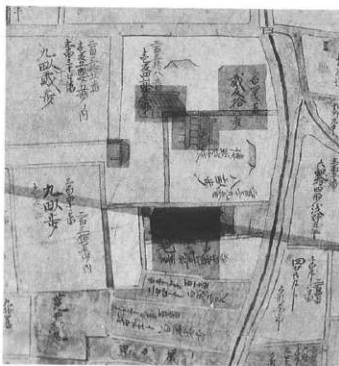
82. 84

83. 49. 32

第13图版 出土陶磁器(3)



第14図版 出土鉄器



(上) 神宮寺周辺

(左) 同拡大

第15図版 三の宮村(明治6年)絵図 浅野成実氏蔵

松本市文化財調査報告 No84

松本市三の宮遺跡Ⅳ

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 株式会社総合印刷

